３　遺構外出土の遺物（第Ⅱ－41～114図、写真図版17～67）

遺構外出土の遺物の総数は 164,315 点であり、本遺跡調査出土遺物総点数（169,137 点）の 97.1%を占める。これは、調査区内支沢を中心とした包含層遺物の大量集中出土に起因するものである。詳細については総括において後述するが、縄文時代中期～後期の各段階遺物が明確な層序を為さずに重複・混在して出土していること、各期遺物の分布の傾向、遺構群が帰属する時期とそれを被覆する包含層内遺物の年代的逆転などの状況を勘案し、調査区外後背高地に位置する何らかの別時代遺構・堆積（例えば盛土等に類するもの）が存在し、それらから流入・流下したものを含む可能性が考えられる。

(1) 土器（第Ⅱ－41～82 図、写真図版 17～53）

Ⅰ群：縄文時代早期（第Ⅱ－41 図－１、写真図版 17）

本遺跡における当該時期資料は極めて少ない。１は自縄自巻縄による羽状縄文を施す薄手の胴部破片で、東釧路Ⅳ式に相当するもの。

Ⅱ群：縄文時代前期（第Ⅱ－41 図２～13、写真図版 17）

いずれも前期後半、円筒下層式に属するもの。２は円筒下層ｂ式、３は円筒上層ｃ式の口縁部破片。４～13 は円筒下層ｄ式。口縁部に文様帯をもち横走する撚糸文を施す。胴部には原体の縦回転押圧による撚糸文（４・５・10）や多軸絡条体圧痕文（６～８）などが地文として施される。さらにその上から結束第一種原体による結節（10）あるいは沈線（11）などを巡らせ胴部文様帯をさらに水平等分するものもある。４～７は円筒下層ｄ１式で、口縁部文様帯と胴部文様帯は結束第二種原体による綾絡文で区画する。８・９は円筒下層ｄ２式。刺突列を伴う微隆起（８・９）によって文様帯を区画している。12・13 は器形・文様帯構成等は円筒下層ｄ式に類するものの、口唇部への短縄線キザミの発達・文様帯区画の明瞭化（貼付帯の肥大化）・胴部地文原体の横回転化（副次的に胴部文様帯の水平等分に用いられていた要素である結束原体縄文の主文様化）など、より次段界である円筒上層ａ式に近しい特徴を示しており、両型式間の遷移段階に相当するものと考えられる。

Ⅲ群：縄文時代中期（第Ⅱ－42～60 図、写真図版 17～36）

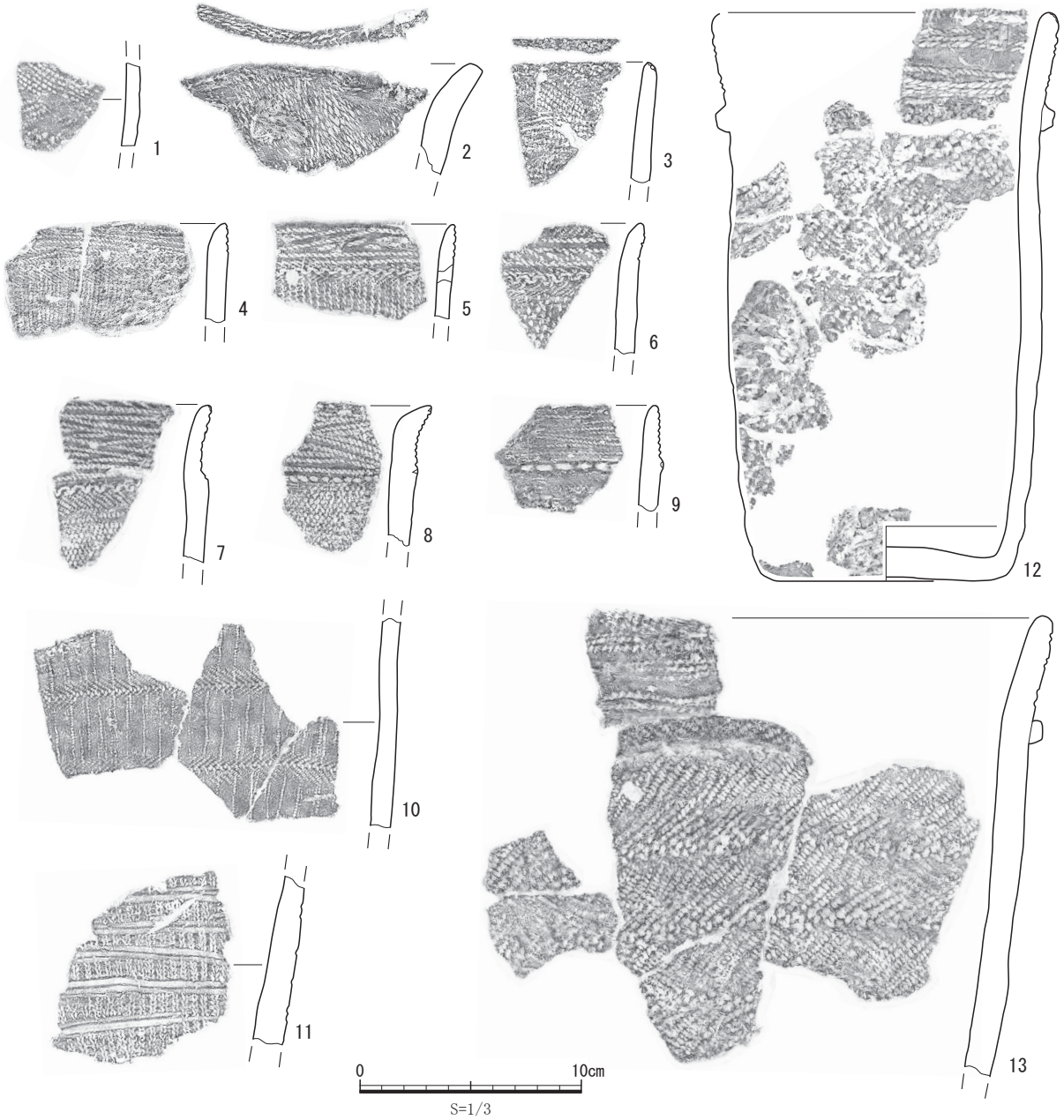
Ⅲ群Ａ類（第Ⅱ－42～58 図、写真図版 17～34）

前期前葉～中葉、円筒上層式に属するもの。本遺跡において出土遺物の主体をなし、復元状況も良好であるが同期に帰属する遺構の検出は集中出土地点より距離を置いた位置で検出された円筒上層終末期とみられるフラスコ状土坑のほかはみられず、これらを包含する土層がより後…中期後葉・後期…の遺構を被覆する状況であった。本節冒頭で述べた通り、調査区近隣に当該期の盛土等が存在し、そこから流水等なんらかの要因によって流下堆積したものと想定される。

Ⅲ群Ａ類１種（第Ⅱ－42～52 図 14～76、写真図版 17～29）

円筒上層式前半、ａ～ｃ式に相当するもの。口縁部文様帯と胴部文様帯の区画が明瞭で、口縁部文様帯は平行撚糸（縄線）文キザミを密に付与した幅広の貼付隆帯文間を平行撚糸（縄線）文・馬蹄状縄圧痕等の刺突列を組み合わせ充填することによって描かれる。口唇部は肥厚し、鋸歯状の隆帯文・縄線文などにより装飾される。原則として地文は区画より下位・胴部文様帯にのみ施文され、原体として結束第一種縄を主に用いほぼ等間隔で水平方向に回転押圧される。施文の際は結束部を中心に原体両開端まで隈なく押圧しており、器面に開端を結紮した系の痕が遺る例が多い。器壁は厚手で焼成は良好である。

14～18 は円筒上層ａ式に相当するもの。口縁部文様帯は垂下する隆帯により４等分され、口縁部文様帯は同撚異撚混在する複数条一組の平行撚糸（縄線）文による鋸歯状文などにより充填される（14～16）。17・18 は頸部にくびれ・肩部に膨らみをもつ深鉢。口縁部文様帯は無文（17）または縄線文のみ



第Ⅱ－41図　遺構外出土の土器（1）

が施され（18）、胴部施文回転方向が前段階・円筒下層式にみられる縦方向であることなどを勘案し、円筒上層式の初段階に属するものと判断したもの。

19～22 は円筒上層ａ式からｂ式の遷移段階と想定されるもの。極めて幅広の垂下隆帯（19・20・22）や鋸歯状平行縄線文(21)など円筒上層ａ式の要素を有しながらも、やや屈曲の弱い馬蹄状縄圧痕列が施されるなど、円筒上層ｂ式の要素もみられるものをこれに分類した。

23～51 は円筒上層ｂ式に相当するもの。口縁部を垂直区画する垂下文は多条化・複雑化し、幅広の隆帯によって区画され縄線文・馬蹄状縄圧痕などで充填する一箇の文様帯を構成するようになる。これに対応して口縁部突起も発達・大型化し弁状を呈する。器形は概ね底部でややすぼまる円筒形を呈し、口縁部で大きく広がる（23～46）。大型のもの（23～27）もあり、最も長大なもの(27)で器高は約 70cm に達する。口縁部文様帯の文様構成は口縁突起下の垂下文様帯を軸として展開され、その間は平行縄線文

と馬蹄状縄圧痕列を交互に横走施文するのみで肋骨様を呈するものが多い（24～26・28～36・38・39・42～44・46）が、隆帯を加えるもの（27・37・40）もある。口縁部・胴部の文様帯区画は箍状の隆帯によってなされ、多くは２条一組（23～25・27～28・30～35・37・38・40～43・46）であるが、１条のみ巡るもの（26・29・36・39・44）もある。２条一組の場合、途中縦位・斜位などの貼付隆帯によって区画されるもの（23・25・28・30～32・34・35・37・38・41・42）、平行縄線文・馬蹄状縄圧痕列により充填されるもの（25・28・32～34・41）がみられる。47～58 は平縁のもので、肩部の張り出し・頸部のくびれなど、口縁突起を有する円筒形の個体とやや異なる器形的特徴を呈する。垂直区画の基準となる突起がないためか、垂下文様帯を持たずに口縁部文様帯が展開するもの（47・48・53・54）、口縁端部側縁につまみ・ボタン状の突起を設けるもの（50・53・54）・隆帯文が口縁部文様帯に広く展開するもの（47・48・51・53・54）など文様構成も口縁突起を有するものとはやや異なる。49・52・55～57・58 は地文のみを口縁端部を除く全面に施文する同形の個体。

59～73 は円筒上層ｃ式に相当するもの。円筒上層ｂ式と器形・文様構成・モチーフ等で近似するが、馬蹄状縄圧痕列が刺突列に置換されている。円筒上層ｂ式ではほぼ例外なく馬蹄状縄圧痕列と並列して施文されていた平行縄線文が略される個体（59・62・64・68・69・71）もある。刺突列の施文に使用されるものは角形工具（59・61～64・70・71・73）のほか、棒状工具（60・66）・稈（68・72）など多様である。また、円筒形・平縁形を問わず隆帯文が口縁部文様帯全面に展開するものが多く（59～66・68・71～73）、隆帯が主たる文様要素となる次段階・円筒上層ｄ式への遷移をうかがわせる。

74～76 は器形・文様帯構成などに円筒上層式前半の特徴を有しながらそれらに特有の馬蹄状縄圧痕列・刺突列などの文様要素をもたない個体。円筒上層ｃ式－ｄ式の中間型式の可能性がある。

なお、円筒上層ｂ式・円筒上層ｃ式については、付着炭化物の遺存状態が良好であった各１個体ずつについて放射性炭素年代測定を実施しており（Ⅲ章）、上層ｂ式資料（第Ⅱ－50 図－53）では 4,740±20BP、上層ｃ式資料（第Ⅱ－51 図－61）では 4,500±20BP という結果が得られている。

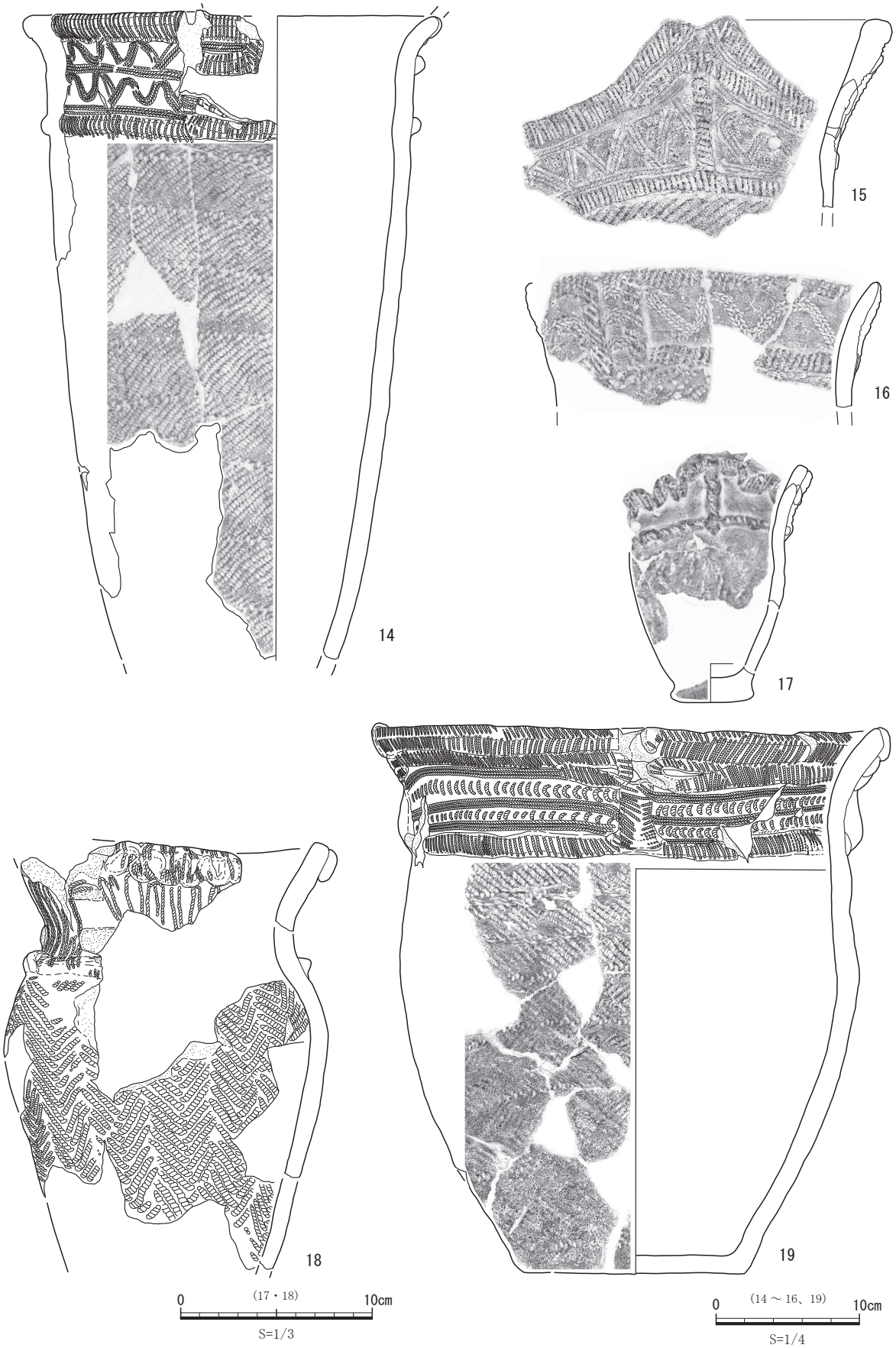
Ⅲ群Ａ類２種（第Ⅱ－53～58 図 77～105、写真図版 29～34）

円筒上層式後半、ｄ・ｅ式および道南地域における上層式終末型式である見晴町式に相当するもの。

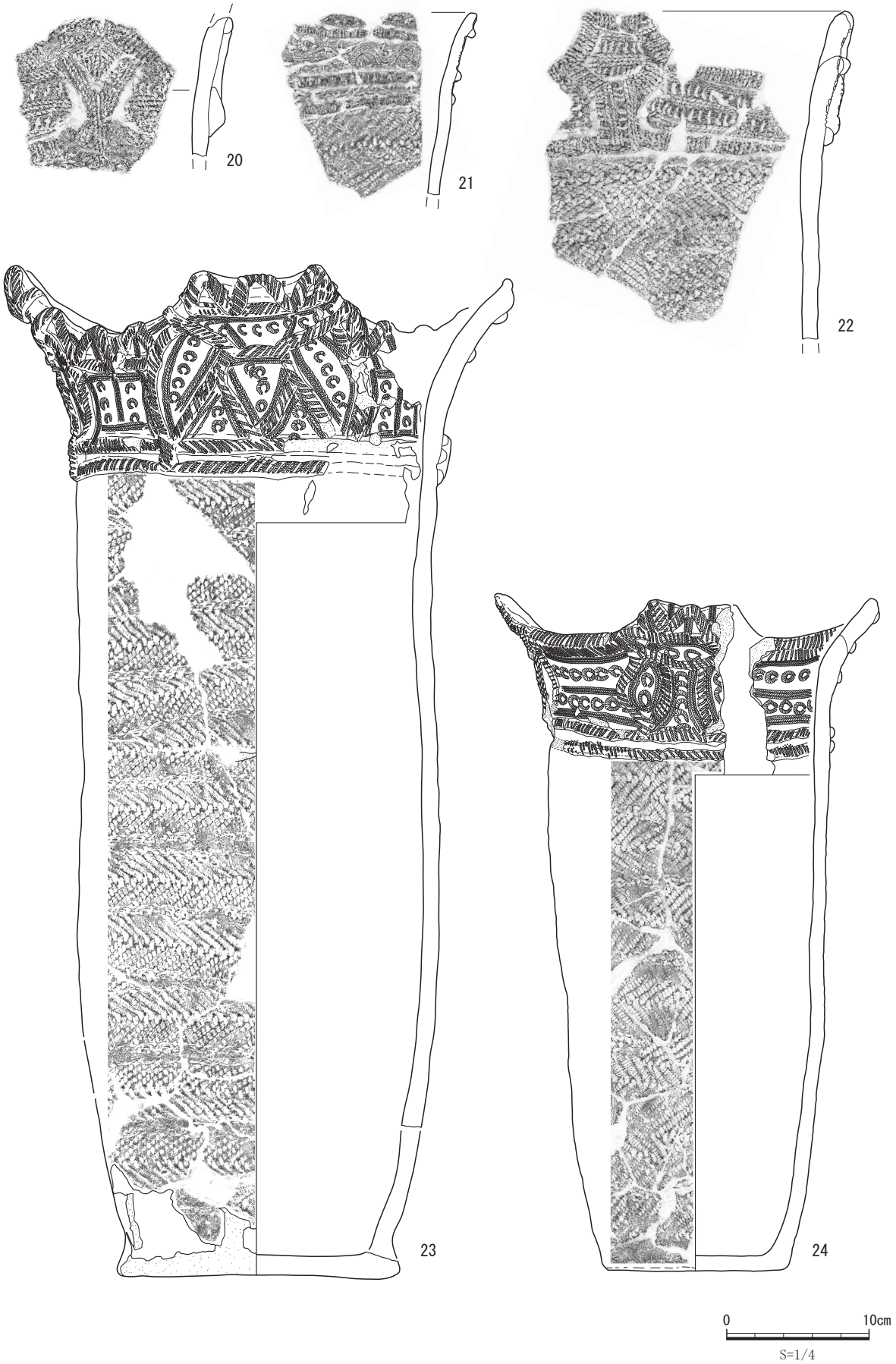
77 は細めの貼付隆帯による弧状文など円筒上層ｄ式の特徴を有しながら、円筒上層ｃ式の特徴である刺突列が施文される口縁部破片。両型式の中間型式のうち上層ｄ式寄りと想定される資料。

78～92 は円筒上層ｄ式。器面に広く展開する隆帯文を特徴とする。口唇部は肥厚するもの（78・82～85）もあるが総じて薄くなり、装飾も隆帯文（78・82）から斜行する縄線文（83）・縄線キザミ（80・81・85～88・90～92）が多くなるなど前段階と比して簡素である。地文は胴部全面に施文されるようになり、隆帯文が胴部中位から下半近くまで施されるようになるなど、文様帯区画は曖昧になる。地文原体としては結束第一種のほか結束第二種（85）が用いられる。施文単位の重複・切り合いが目立つようになるなど、円筒上層式前半のような水平・等間隔の地文施文はまれになり、開端結紮系痕もほぼみられなくなる。隆帯は前段階に比して細くなり、付与される装飾も前段階に比して粗めの撚糸キザミ（78・79・82・83・86）や、縄文（80・92）・平行撚糸押圧（81・91）あるいは装飾そのものを行わないもの（84・88・89）など多様化する。文様モチーフとしては肋骨様のものと弧状のものが混在する。82～84 は把手状の側面突起を有する個体。いずれも平縁で、円筒上層ｂ式にみられた側縁につまみ状突起を作出する平縁個体の系譜に連なるものと想定される。

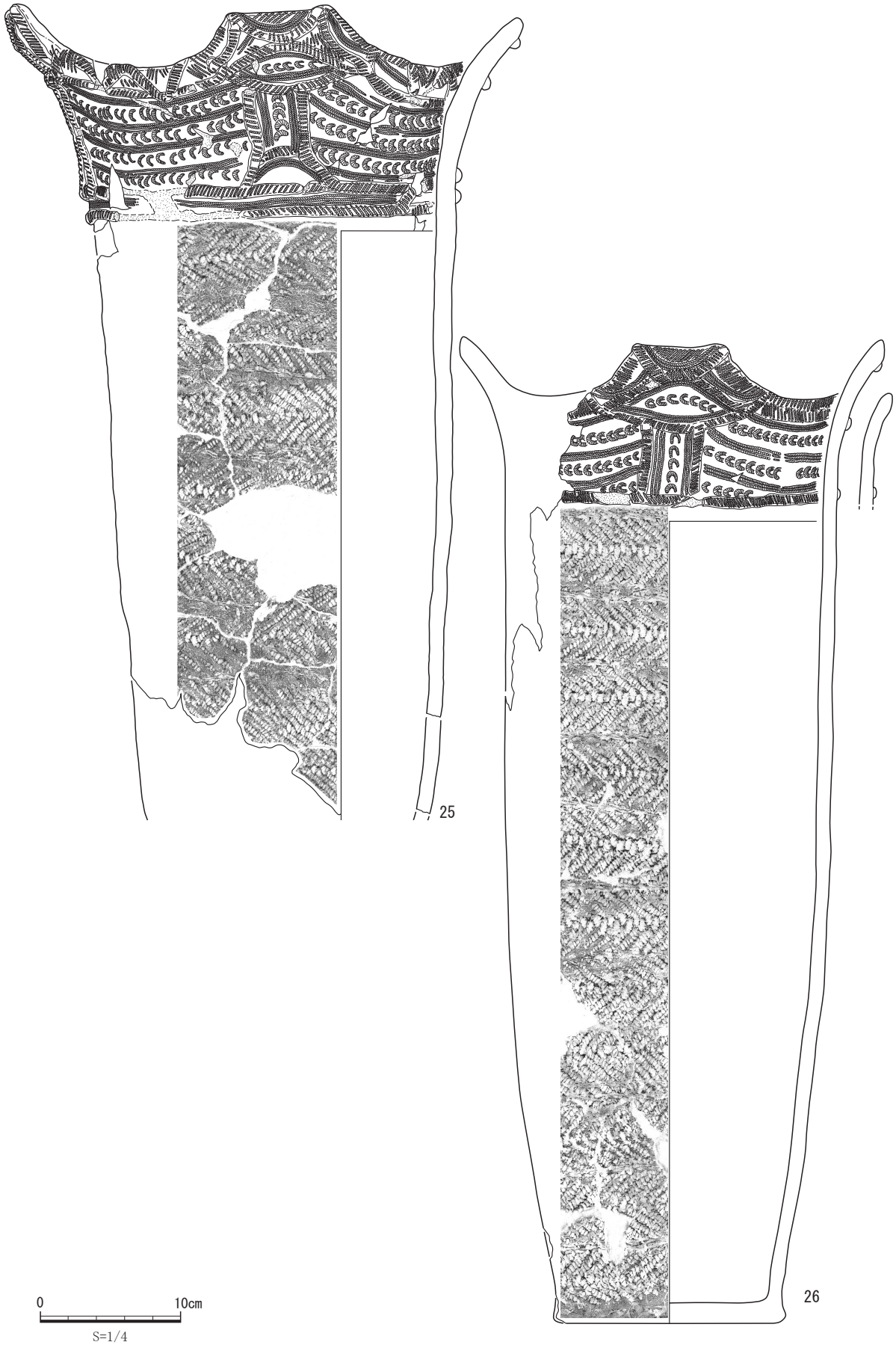
93～100 は円筒上層ｅ式。いずれも円筒上層ｄ式にみられる肋骨様モチーフを沈線で描く。地文原体は結束しない単節縄が用いられ、斜行縄文が器体全面に施される。口唇部装飾は縄線（93・95～99）あるいは棒状工具（94）によるキザミが施される。93 はやや幅広の口唇に沈線が施文されるもので、大木８ａ式あるいは榎林式に同様の口唇装飾がみられることから、それらとの関連・影響を想起させる。97～99 は、精緻な調整・装飾を施した山形の突起を有する口縁部片。本遺跡出土の同時期資料と器質等にお



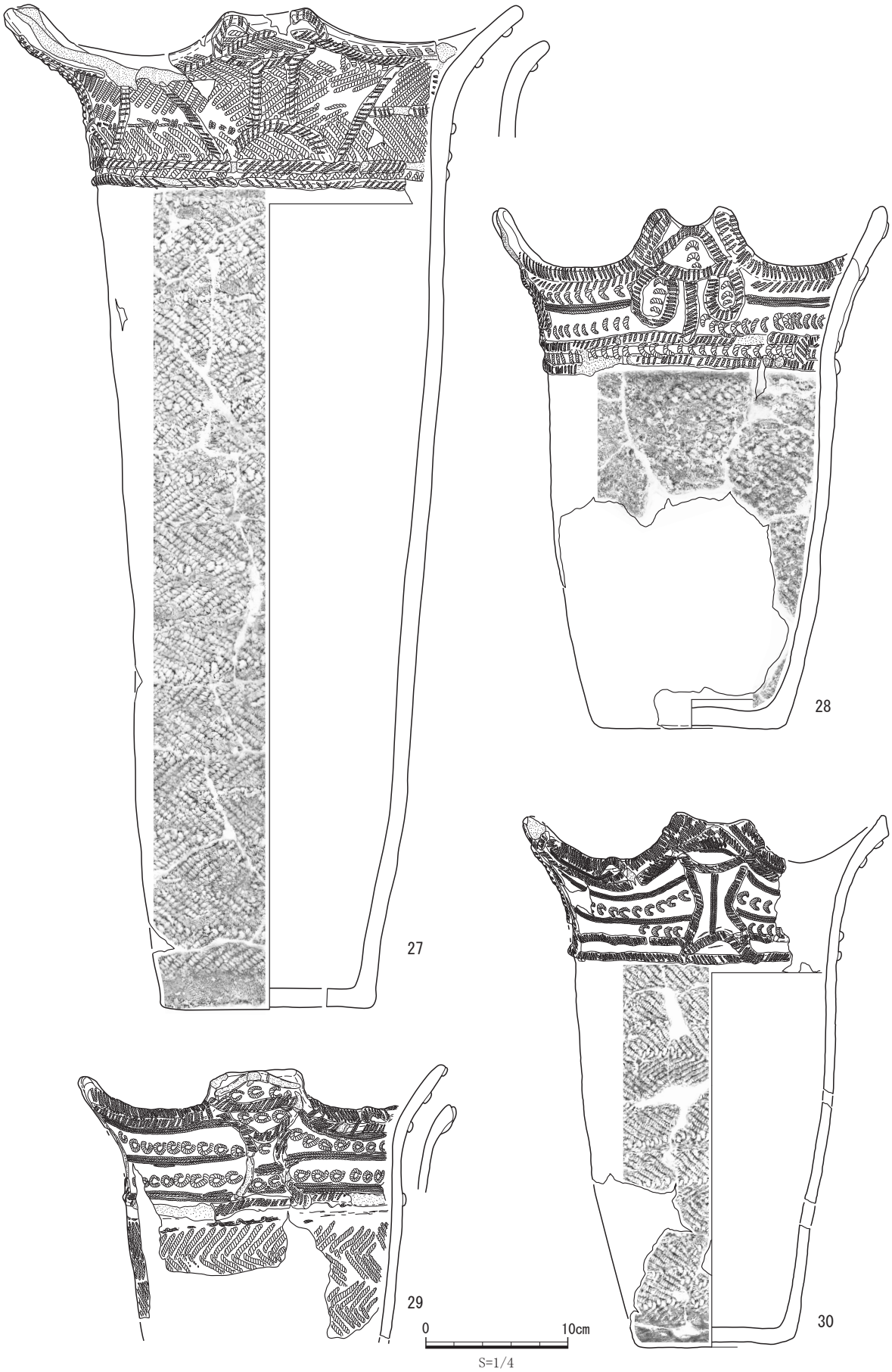
第Ⅱ－42図　遺構外出土の土器 (2)



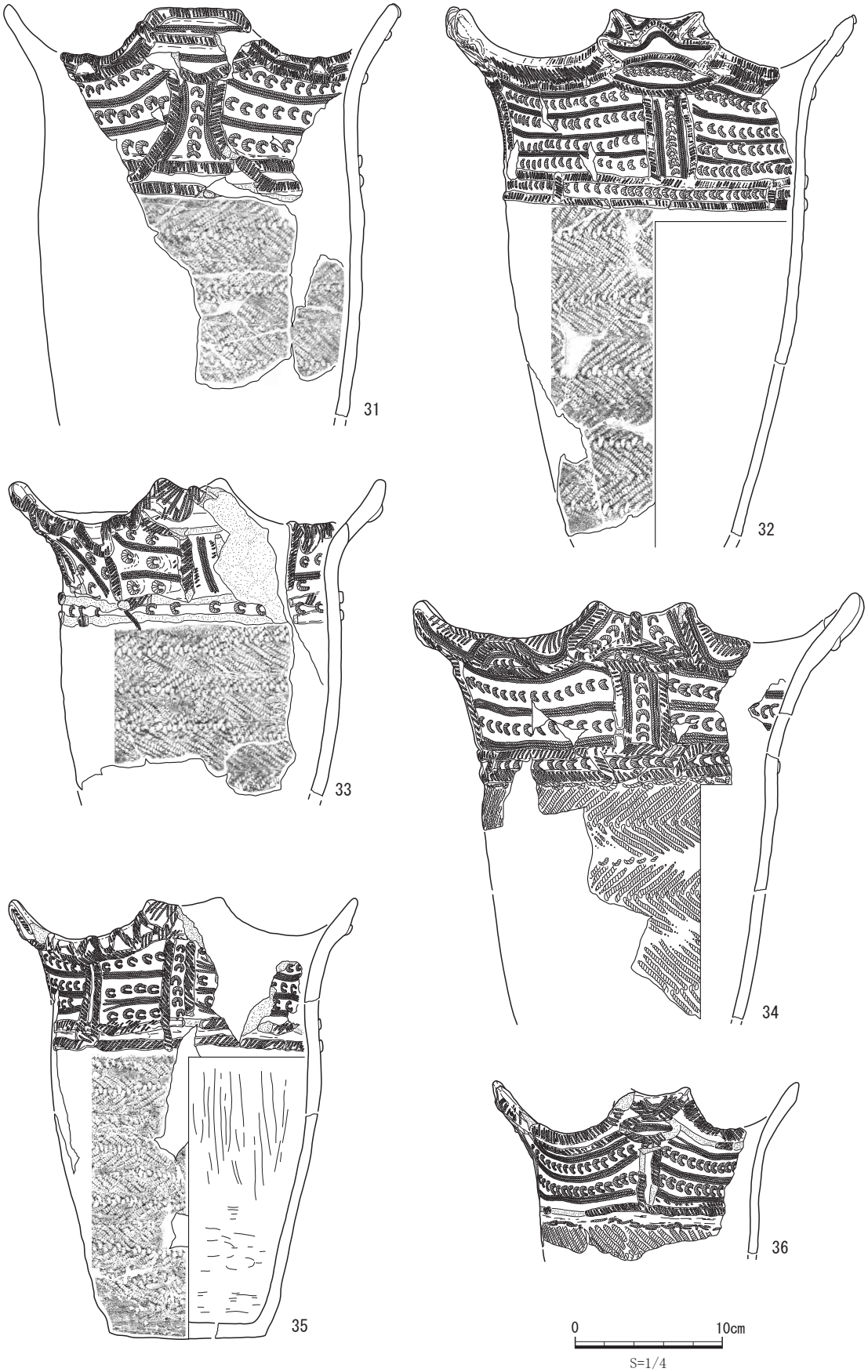
第Ⅱ－43図　遺構外出土の土器 (3)



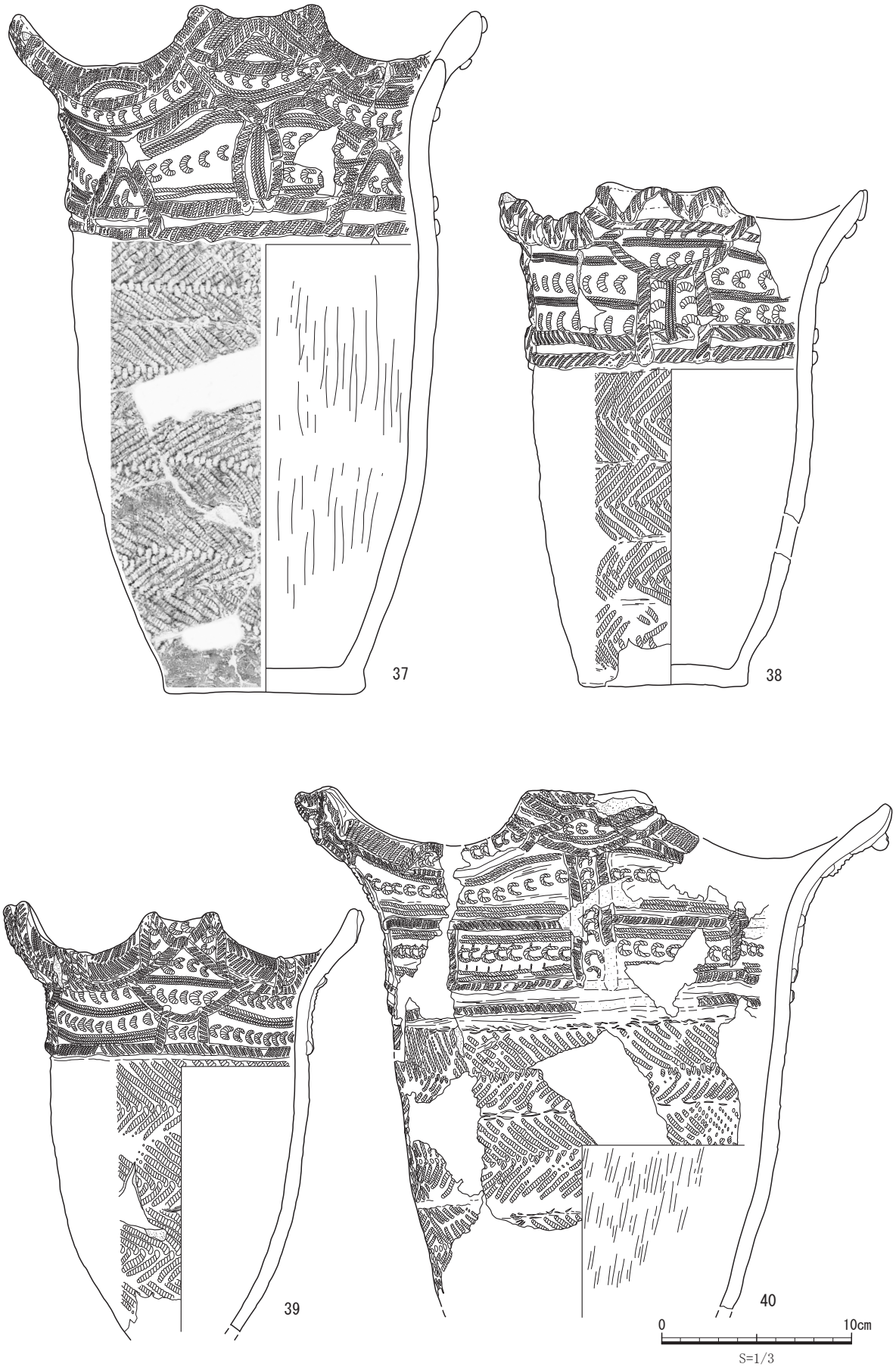
第Ⅱ－44図　遺構外出土の土器（4）



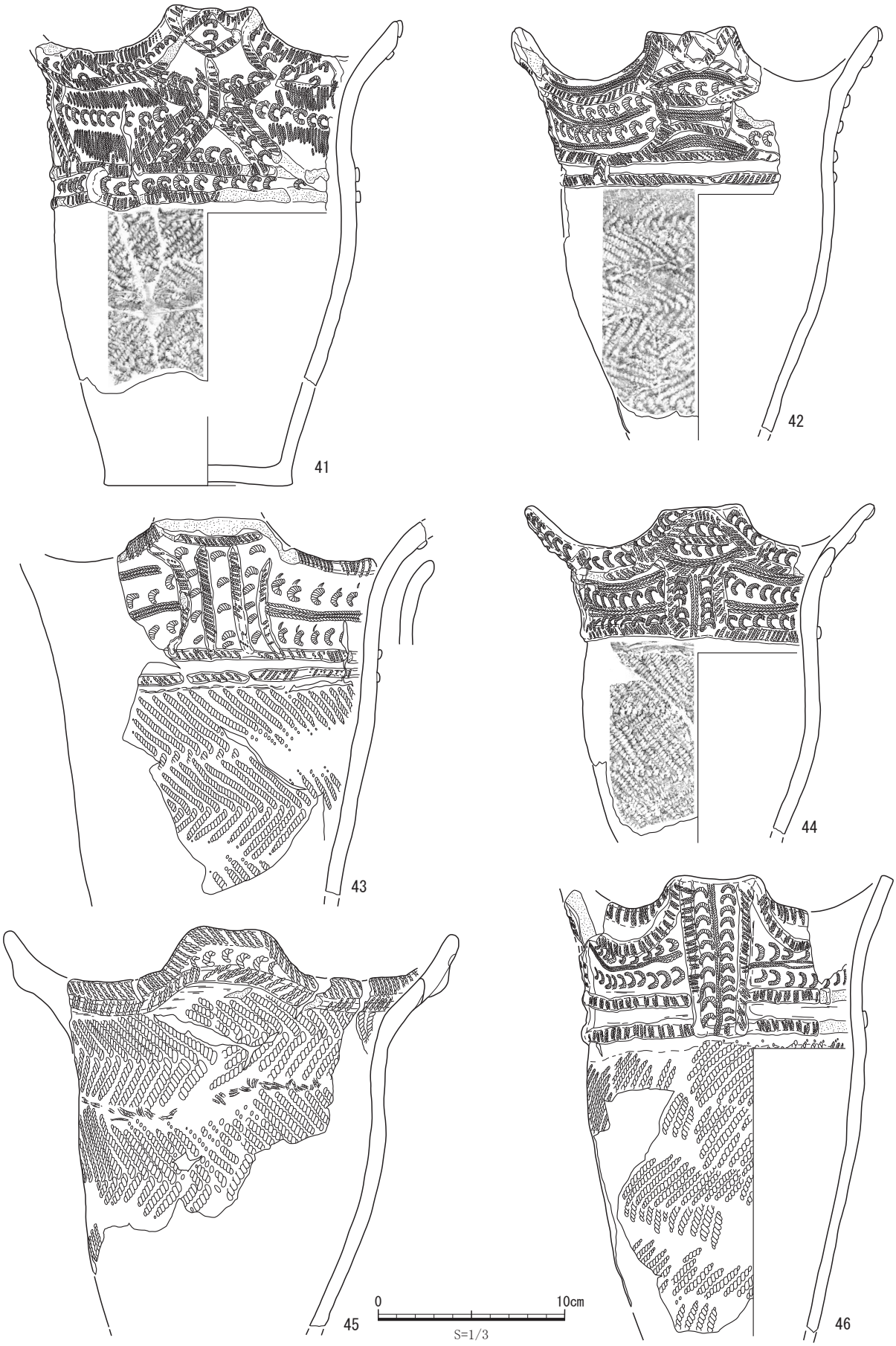
第Ⅱ－45図　遺構外出土の土器（5）



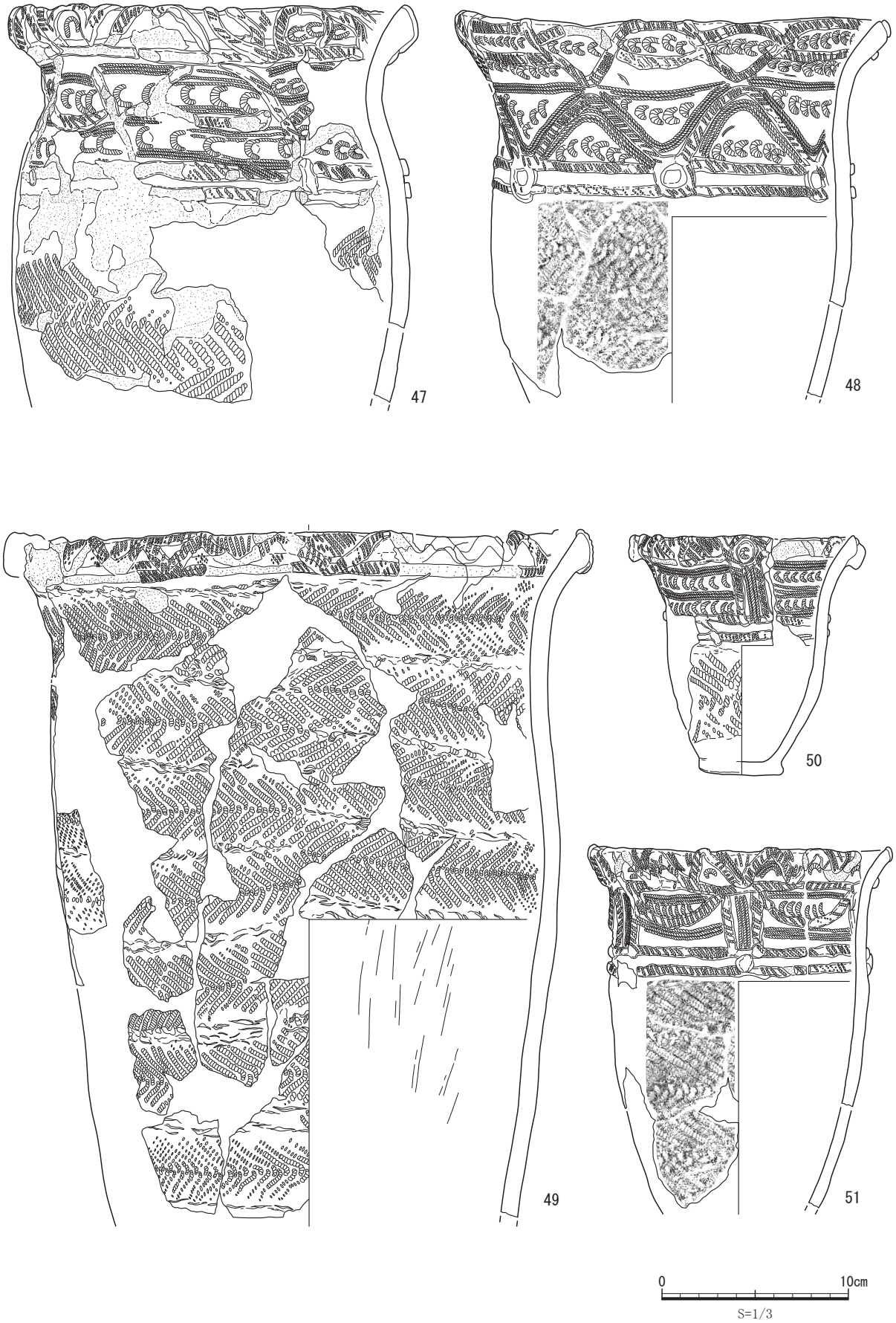
第Ⅱ－46図　遺構外出土の土器（6）



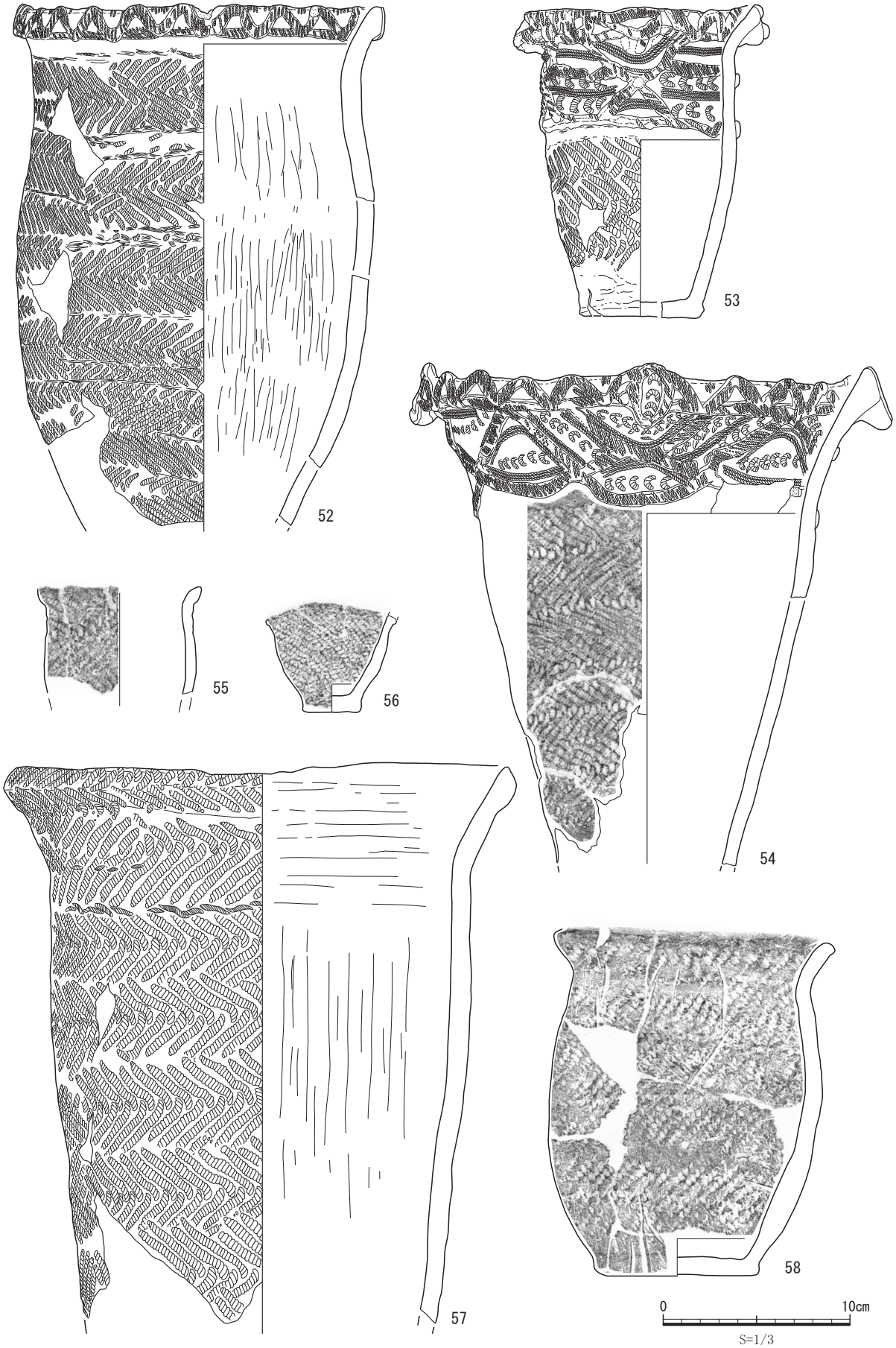
第Ⅱ－47図　遺構外出土の土器（7）



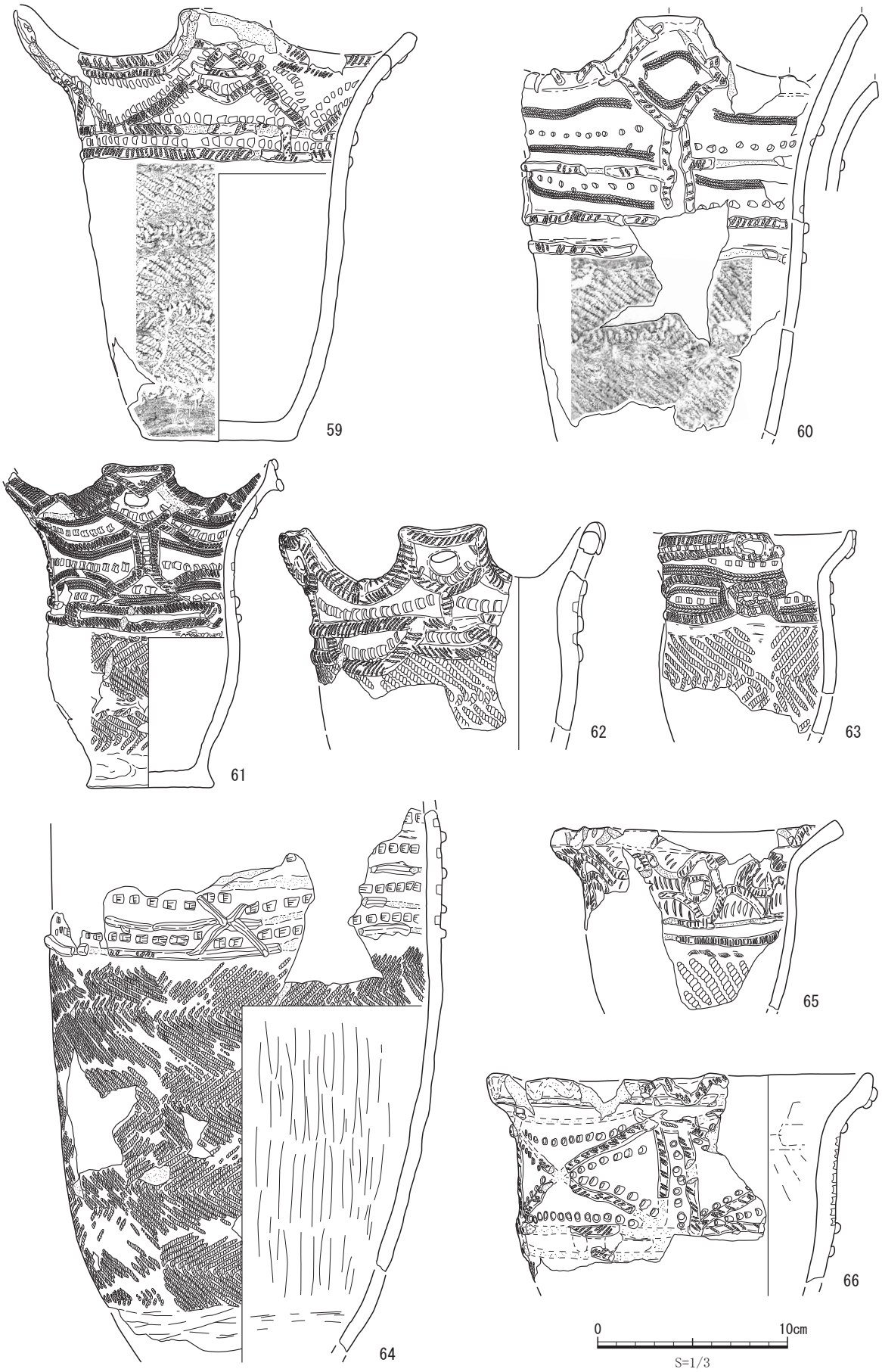
第Ⅱ－48図　遺構外出土の土器 (8)



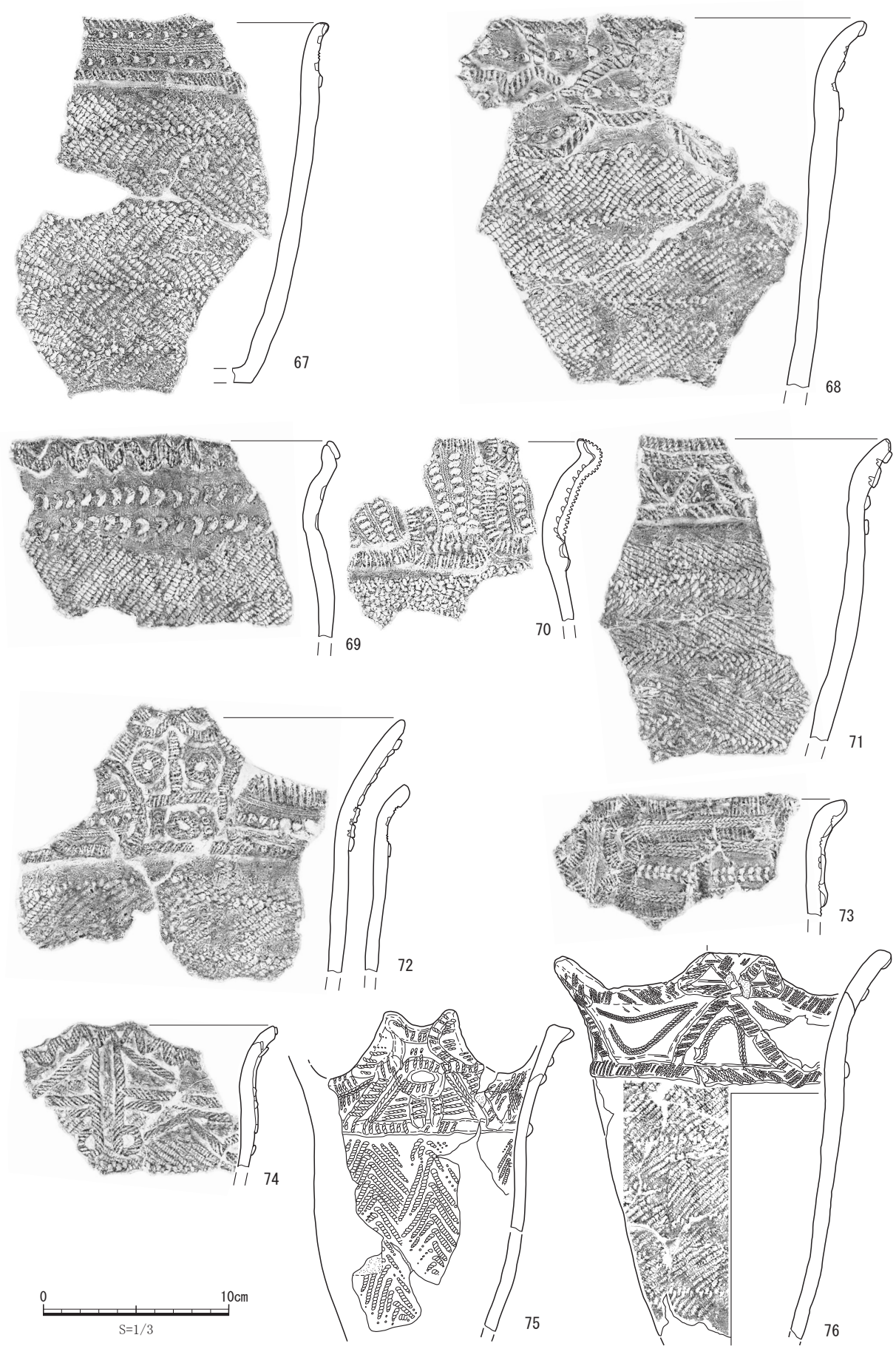
第Ⅱ－49図　遺構外出土の土器 (9)



第Ⅱ－50図　遺構外出土の土器（10）



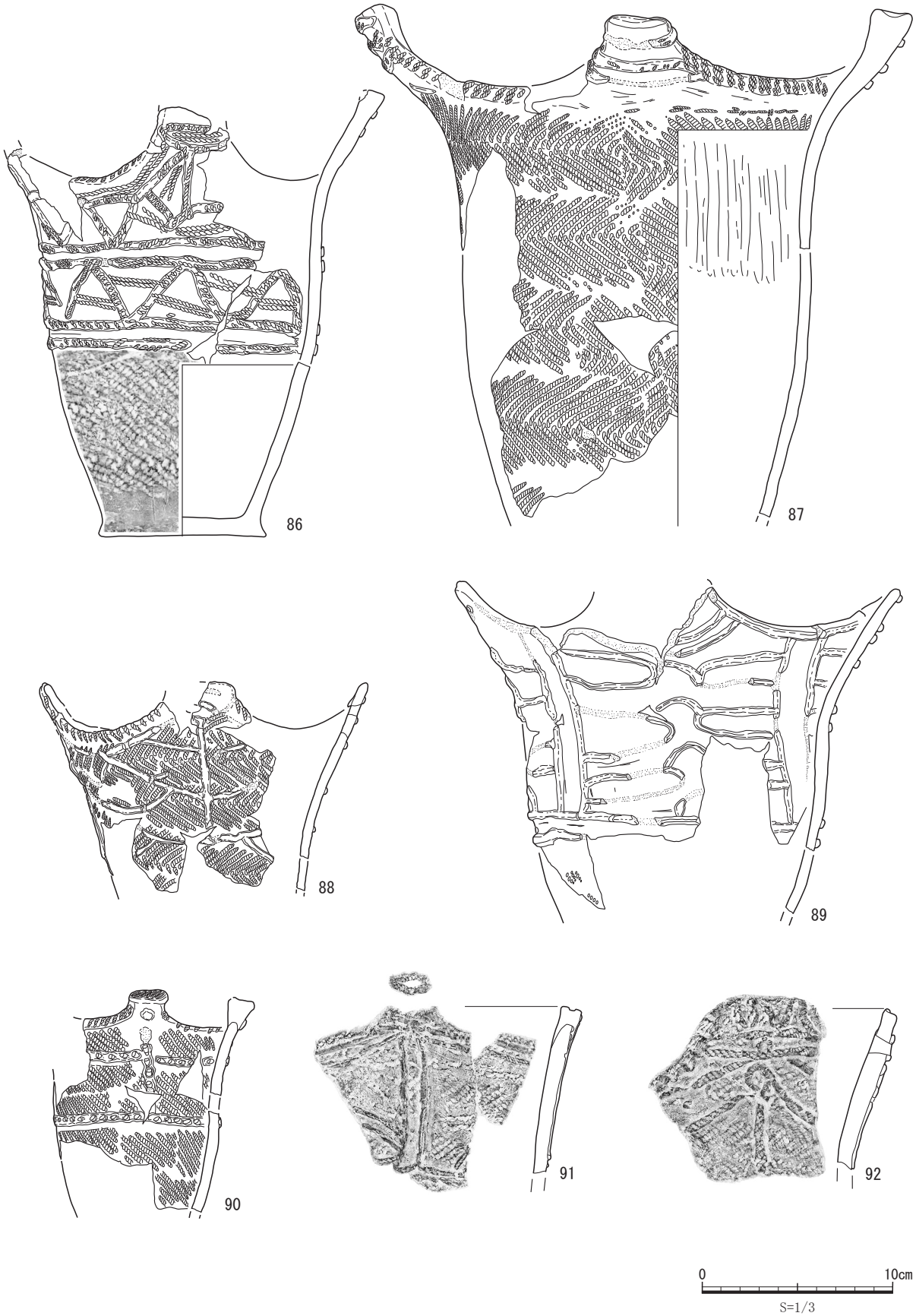
第Ⅱ－51図　遺構外出土の土器（11）



第Ⅱ－52図　遺構外出土の土器（12）

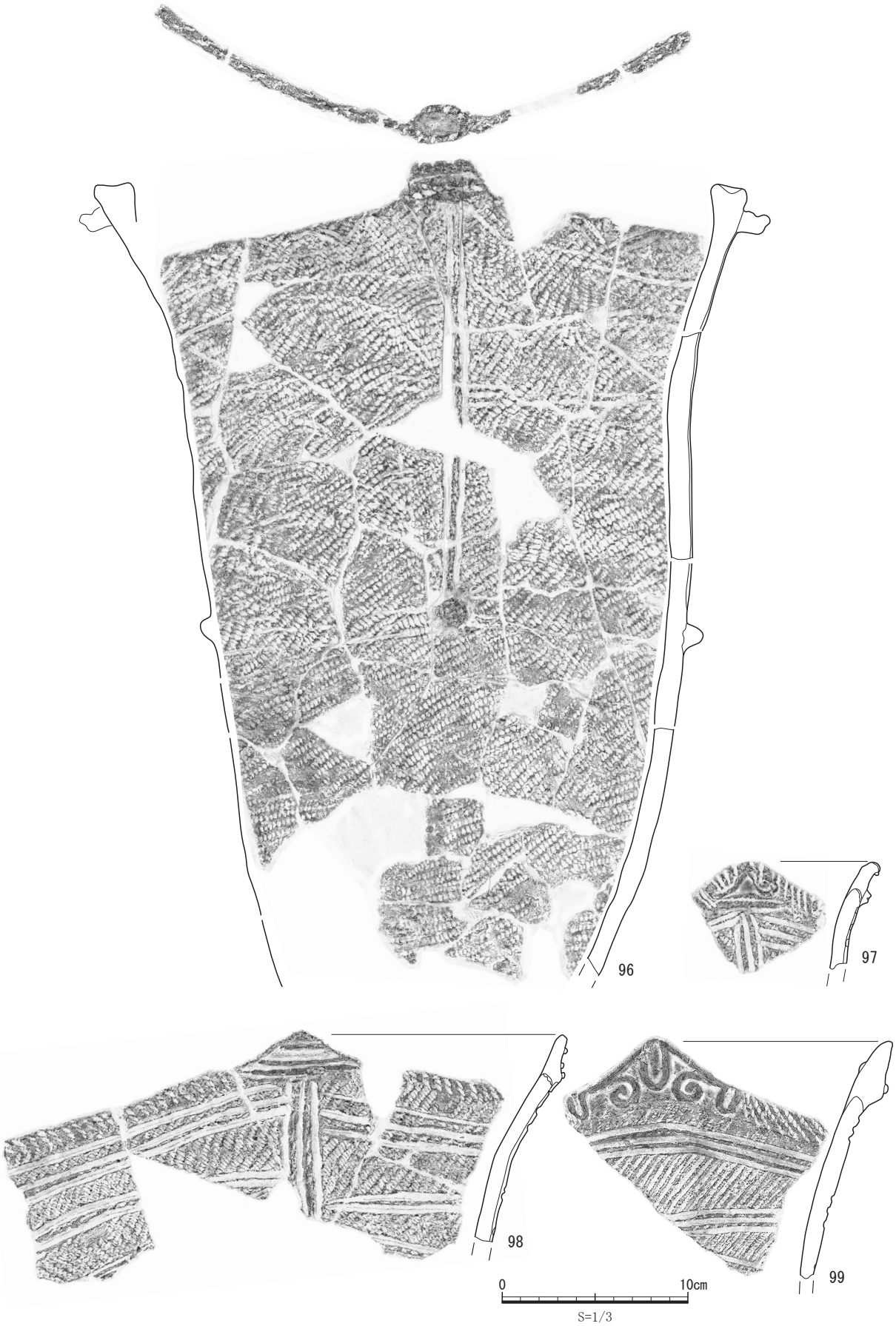
第Ⅱ－53図　遺構外出土の土器（13）

第Ⅱ－54図　遺構外出土の土器（14）

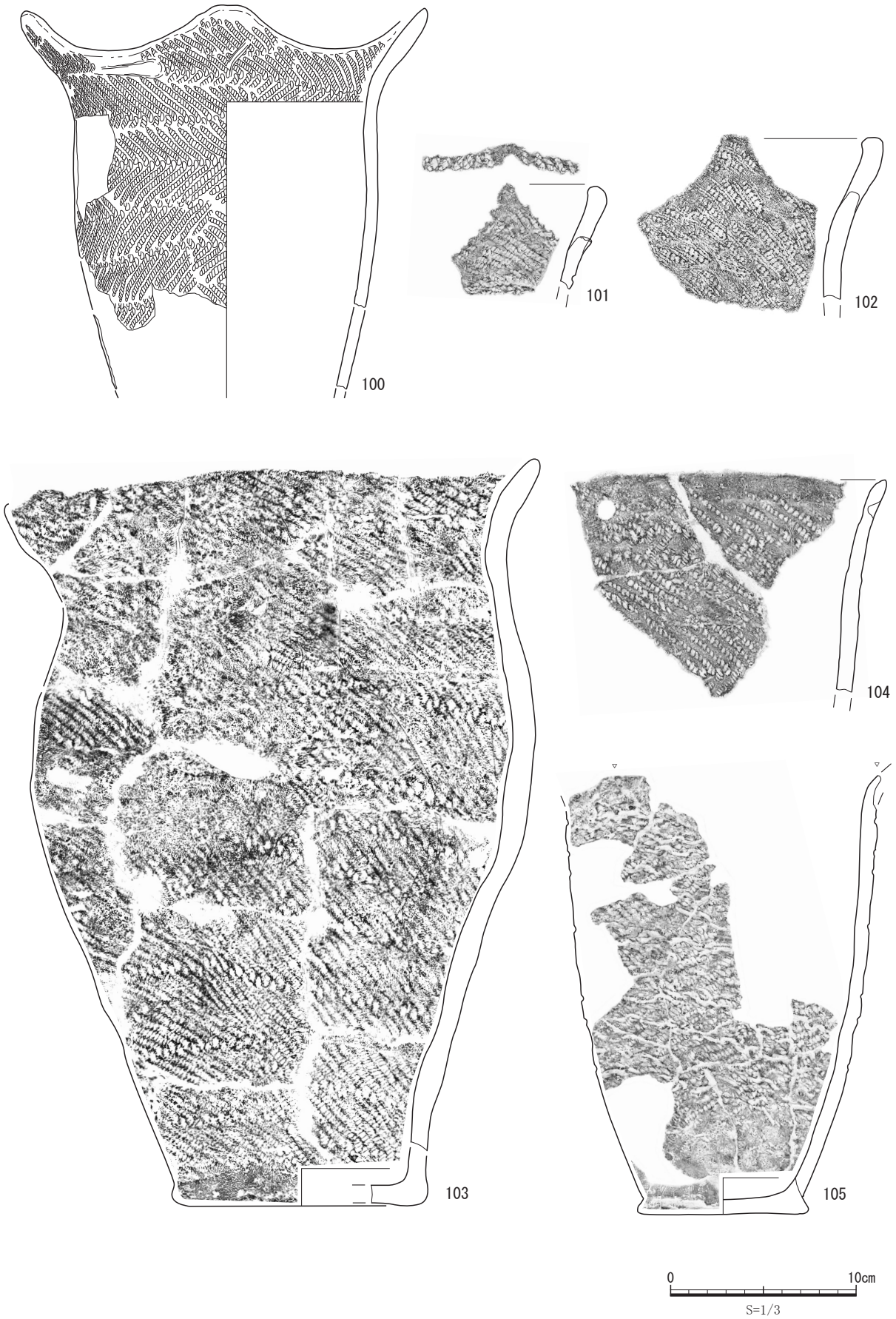


第Ⅱ－55図　遺構外出土の土器（15）

第Ⅱ－56図　遺構外出土の土器（16）



第Ⅱ－57図　遺構外出土の土器（17）



第Ⅱ－58図　遺構外出土の土器（18）

いて異質であり、搬入品の可能性が高い。100 は地文のみを施文する深鉢。

101・102 は見晴町式に相当するもの。いずれも地文のみを施文する山形突起を有する口縁部片。

103 は地文のみを施文する平縁の深鉢。地文の施文単位が不規則に重複すること等から円筒上層式後半に相当すると考えられる個体。104 は結束第一種縄文を施文する口縁部片。105 は地文施文後に縄結節の回転押圧による綾絡文を密に付与する個体で、円筒上層式後半の深鉢。

Ⅲ群Ｂ類（第Ⅱ－59・60 図 106～129、写真図版 34～36）

縄文時代中期後葉の土器群。本遺跡遺構のうち一群は、形状・出土遺物等から判断して、この時期のうち大安在Ｂ式～ノダップⅡ式期に帰属するものと想定される。

106・107 は榎林式に相当するもの。垂下あるいは水平に沈線文を配し方形のモチーフを描く個体。

108～113 は大安在Ｂ式に相当するもの。頸部にくびれを持ち口縁部で大きく開く器形をもつ。原体の斜め方向回転押圧による横走縄文を主たる地文とし、頸部下端で区画される口縁部文様帯に、縄線文あるいは頂部に縄線文を沿わせる厚めの隆帯により方形のモチーフを描く。

114～116 は地文のみが施される深鉢であるが、器形や地文の施文方向等から大安在Ｂ式の新手～ノダップⅡ式に相当すると想定されるもの。117 は無文であるが器形等より同期と推定される小型の深鉢。

118・119 はノダップⅡ式に相当するもの。くびれをやや残す器形に、原体の斜行回転押圧による横走（118）あるいは縦走（119）縄文を施文し、頂部に縄線文を沿わせる微隆起帯によって装飾するもの。

120～129 は煉瓦台式に相当するもの。120～127 は、施文構成はノダップⅡ式に近似するものの、微隆起帯に付与されるものが短刻線列・刺突列であるもの。地文縄文は従前の斜め方向回転押圧による横走縄文（123・126）のほか、後期初頭の土器群において主体となる縦回転押圧による斜行縄文（120・～122・124・125）がみられる。128 は肩部に張り出しをもつ深鉢の口縁部－胴部片。地文縄文は RL 原体の縦回転押圧による斜行縄文で、刺突列を付与する貼付隆帯文を水平・箍状および垂直に施す。129 は半完形の深鉢で、箍状の隆帯を口縁端部・口縁部および胴部に複数巡らせたのち、LR 原体を縦回転押圧した斜行縄文を地文として施している。箍状隆帯上には横回転押圧して斜行縄文を施したのち刺突列を付与している。口縁で内傾する器形、口縁部の箍状貼付帯による区画など、大木系の影響も伺える。

Ⅳ群：縄文時代後期（第Ⅱ－61～82 図、写真図版 36～53）

Ⅳ群Ａ類（第Ⅱ－61～77 図、写真図版 36～50）

縄文時代後期初頭の土器群。

Ⅳ群Ａ類１種（第Ⅱ－61～73 図 130～260、写真図版 36～46）

縄文時代後期初頭の土器群のうち、在地系の土器群に相当するもの。

130～156 は天祐寺式に相当するもの。倒鐘形の器形をもち、口縁部および胴部に箍状の隆帯貼付を巡らす。口縁部の箍状隆帯は明瞭な段差をもつものが多い。原則として器面全体の地文は縦方向、「箍」部は横方向と原体施文の際の回転方向を変えることにより、部位・文様帯を区別している。なお、これは後続する在地系土器においても基本的に踏襲される。

130・131 は器形・施文等は天祐寺式の特徴をもつが、口縁端部箍状隆帯に短刻線列を付加するもの。前段階・煉瓦台式からの遷移段階の資料。

132～137 はⅣ群Ａ類１種ａ、天祐寺式の古手。地文として縄文が器体全面に施され、複数の箍状隆帯が胴部全般に巡らされるもの。

141～156 はⅣ群Ａ類１種ｂ、天祐寺式の新手で、口縁部に箍状隆帯で区画された無文帯を作出するもの。大木 10 式およびその系譜に連なる土器群のうち口縁部に無文帯を有する群（第Ⅱ－74 図 261～278）の影響にあるものと考えられ、それらに特徴的な垂下文を模した隆帯を施文するもの（147～150・153・154）や縄文を帯状に施文するもの（155）もある。151・152・153・154・156 は箍状隆帯上に縄線

文を付与するもの。156 は口縁端部の隆帯を持たないもの。

157～163 はⅣ群Ａ類１種ｂに併行するもので、箍状貼付の代わりに縄線文で無文帯を区画するもの。157・158・160 は口縁突起を作出するもの。うち 158 は、突起下に弧状に縄線文を施しており、大木系土器群にみられるＣ字隆帯を想起させる。同様の弧状縄線文は 163 にもみられる。164～166 は稈刺突列により代替するもの。167 は網目状の撚糸文を口縁端部に帯状に施文するもの。

168～260 はⅣ群Ａ類１種ｃ、天祐寺式に後続する在地系の土器群。茂辺地４遺跡報告でⅣ群Ａ類３種としていたもの（狭義の「涌元式」あるいは「涌元Ⅰ式」に相当するが、同型式については報告により大木系も包括するなど定義に曖昧な点があるため本書ではその呼称を用いない）。

168～217 は天祐寺式と同様の器形・施文的特徴を有するが、口縁端部に文様が収斂するもの。168～180 は口縁端部に縄文あるいは他の地文原体による文様を施した箍状の隆帯あるいは折返口縁を巡らせるもの。169 は地文原体結紮系の痕が稜絡文様に顕著に遺るもの。176 は地文原体として単軸絡条体を用いているが、胴部は縦・口縁部は横という原体回転方向は堅持されている。177・180 は箍状隆帯に縄線文を沿わせるもの。181～203 は口縁端部に箍状に縄線文を巡らせるもの。縄線文の原体は原則として地文縄文の原体と同一であるが、189 は同一原体（LR）同士の結束第一種、190 は単軸絡条体による撚糸文、197 は同撚の原体を軸とした付加条、203 は単軸絡条体第５類による網目状撚糸文をそれぞれ地文として施文している。200 は縄結節部の回転押圧による綾絡文を口縁端部と胴部に施文するもの。204～217 は口縁端部に箍状に無文の折返口縁を巡らせるもの。

218～250 は箍状の装飾要素を持たず地文のみを施文するもの。原体としては単節縄のほか、反撚縄（232）・付加条（238・247・250）・単軸絡条体（229・230・234～237・248）などが用いられる。218～231 は無文帯または地文原体の回転方向を変えるなどして口縁部に文様帯を作出し、胴部との区画を行うもの。219・～223 は口縁部で原体の回転方向を変えて幅広く文様帯を作出するもので、特に 219・220 は結束第一種縄を用いているため横走あるいは垂下する結束部圧痕列により原体回転方向の差異がよく見てとれる。224～227 は口縁端部のみ施文方向を変え箍状の文様帯を作出するもの。229 は単軸絡条体により同様の施文を行い、棒状工具による刺突を付与するもの。230 は口縁端部に横回転による縄文、胴部は単軸絡条体の縦回転による撚糸文と別原体を用いて施文するもの。232～250 は文様帯区画を行わず地文のみを施文するもの。

251～258 は底部のうち底面に敷物痕等の遺るもの。251～255 は葉脈痕の遺るもの。256 は底面に縄文を施文するもの。257・258 は網代痕の遺るもの。

259 は丸底の浅鉢。器面に輪積痕が強く遺る。260 は強くすぼまる口縁部を有する個体で、地文ならびに襞状を呈する折返口縁によりⅣ群Ａ類１種と想定されるもの。

Ⅳ群Ａ類２種（第Ⅱ－74～77 図 261～311、写真図版 46～50）

縄文時代後期初頭の土器群のうち、大木系の土器群に相当するもの。

大木 10 式と併行あるいは後続する土器群にみられる、口頸部の文様帯区画（無文帯の作出あるいは沈線・縄線文・隆帯刺突列等による区画）・沈線文あるいは充填縄文によって描かれる胴部の曲線文といった文様構成、口縁部で内湾あるいは胴部で強く張り出す等の器形的特徴において、在地系であるⅣ群Ａ類１種とその特徴を別にする土器群である。

261～278 は口縁部に無文帯をもち、刺突列あるいは弧状の隆帯によって区画・装飾するもの。261 はゆるやかな小波状の口縁を有する深鉢。口縁部に刺突列によって区画された無文帯をもち、突起下に孔が穿たれ、弧状の隆帯刺突列とボタン状の貼付がなされる等、典型的な大木系の要素を有するもの。262 は隆帯上刺突を縄端圧痕で施しているが、同様の文様構成を有する個体。263～267 は 261 と同様の弧状隆帯刺突列をもつ口縁部破片。263 と 264、266 と 267 はそれぞれ同一個体。268 は隆帯刺突列・ボタン状貼付をもつ口縁部片。269 は垂下する隆帯刺突列をもち口縁端部に刺突列を施す口縁部片。270・271

は隆帯・縄線などに在地系の特徴、文様構成やボタン状貼付（271）に大木系の特徴を有する個体で、両系の折衷型式とみられる個体。272 は隆帯刺突列・ボタン状貼付を付与する小型の深鉢。273・274 は同一個体で、沈線で区画された無文帯をもつ小波状口縁部片。口唇端部に刺突列を巡らせ、突起下にボタン状貼付と垂下する刺突列を施文する。275・276 は口縁部無文帯の上端に縄線文を巡らせ、ボタン状貼付を付与する口縁部片。277 は器面全体に刺突を施し、ボタン状貼付を付与する胴部片。278 は器面全体に隆帯刺突列を展開する小型の深鉢。

279～281 は口縁部に無文帯をもたないが、小波状の口縁突起をもち突起下にボタン状貼付を施すもの。282～286 は刺突列などで口縁部文様帯を区画するもの。287 は刺突列で胴部に方形の文様を描くもので、278 に近似する。288 は小波状の肥厚する口縁突起をもち突起下に孔を穿つもの。289 は片口の深鉢。

290～309 は沈線・磨消縄文・充填縄文により大木 10 式にみられる「Ｊ」「Ｓ」字状文・波状文などを描くものとその類型。290 は口縁部に無文帯をもち、沈線と充填縄文で「Ｊ」字文を描く深鉢。有孔波頂をもつ小波状口縁、胴部の強く膨らむ器形をもつ。291～293 は同一個体で、沈線で区画された口縁部無文帯を有し、胴部に沈線で波状文を描く個体。口縁部は小波状で、口縁端部および無文帯再下端に短刻線列を巡らせ、突起下には垂下する短刻線列とボタン状貼付を付与する。器形は底部から口縁部にかけて緩やかに開きながら立ち上がるものと推定される。294 は口縁部無文帯と連結する「Ｓ」字状文を磨消縄文で描く個体。291～293 と同様緩やかに開きながら立ち上がる器形を有し、口縁部突起を有していたものと推定されるがいずれも欠損している。295・296 は沈線を施文する口縁部破片。297・298 は同一個体で、頸部無文帯と胴部充填縄文が連結する、キャリパー形の器形を呈すると想定される個体の口縁部片。299 は頸部にくびれを持つ個体の胴部片で、無文帯下に横位の刺突列が施されるほか、上位に沈線による「Ｃ」字状文、胴部に波状文の一端と思われる沈線文が描かれる。300 は充填縄文により胴部に「Ｊ」字状文を描く深鉢。緩やかに開きながら立ち上がる器形をもち、口縁部には小突起を有し突起上にボタン状貼付が付与される。301～304 は沈線で波状文が施文される口縁部片。305・306 は同一個体で、上位に無文帯・胴部に磨消縄文により文様が描かれる大型の壺形片。底面には網代痕が顕著に遺り、器質等からみて搬入品と想定される。307 は磨消縄文を施す胴部破片。308 は 305 と同様の器形をもつと思われる個体の胴部片で、沈線による波状文が描かれる。309 は沈線により入組波状文が施された底部。310 は 305 と同様の器形を有するが縦走する撚糸文を施すもの。311 は口縁部無文帯・胴部の「Ｓ」字状縄線文などが大木系に近似する深鉢。

Ⅳ群Ｂ類（第Ⅱ－78～80 図、写真図版 50・51）

縄文時代後期前葉の土器群。

Ⅳ群Ｂ類１種（第Ⅱ－78・79 図 312～335、写真図版 50・51）

縄文時代後期初頭～前葉、十腰内Ⅰ式の前段階に相当するもの。同期の分類には諸説あるが、ここでは葛西勵による編年（葛西 2002）に依った。

312 は波状口縁をもつ口縁部片で、突起下には細めの垂下隆帯が貼付され、それを軸に三角状モチーフなどの沈線文が展開する。牛ヶ沢(3)期～蛍沢Ⅰ期に並行するものと想定される。313～322 は沈線文を主体とし、蛍沢Ⅰ期に並行すると思われるもの。313～317 は波状を呈する厚手の折返口縁をもつ個体で、313 は渦巻文、314 は突起下に垂下する蛇行沈線、315 は突起下蛇行沈線とそれを軸として施文される斜行沈線、垂下沈線を軸として「个」字状に展開する沈線文がそれぞれ施文される。317 は 313～316 と同様の器形的特徴を持つ小型の深鉢。318・319 は同一個体で、垂下する沈線を軸に沈線が三角形文をなすように施文されるもの。320 は波状口縁をもつ深鉢。320・321 は波頂部下に垂下する蛇行沈線を施文し、口縁部直下に左右に展開する磨消縄文による無文帯を有することから蛍沢Ⅰ期に並行すると想定される。322 は沈線文のみが施文される小型の個体。胴部に展開する三角形文から蛍沢Ⅰ期に並行するものと想定される。323～325 は二条１組の縄線文で三角形文・渦巻文を施文する個体。324・325 は同一個体で縄線

文間を磨り消しており、近似した文様構成を有する 323 も含め、蛍沢Ⅰ期に並行する個体と想定される。326 は壺形土器の口縁部で、蛍沢Ⅱ期に相当すると思われるもの。327 は格子状モチーフを隆帯で施文する蛍沢Ⅱ期相当の壺形土器。328～331 は沈線で横長の長楕円形文を描く個体。小片のため文様の全体像が判然としないが、特に 330 は突起下に垂下した二個の円形沈線を軸として長楕円形文が左右に展開するなど蛍沢Ⅱ期以降のより新しい段階にみられる施文的特徴を有することから、それらに並行する可能性がある。332～335 は沈線文のみを施文する破片。334 は横位の長楕円形文が多用されるなど、小牧野３期に並行するものと想定される。335 は渦巻文が描かれる胴部片。

Ⅳ群Ｂ類２種（第Ⅱ－80 図 336～342、写真図版 51）

縄文時代後期前葉、十腰内Ⅰ式併行、大津式・白坂３式に相当するもの。

336 は頸部にくびれを持ち口縁部でやや広がる器形の深鉢で、波状口縁を呈すると思われる。口唇に沿って二条１組の沈線文を巡らした後、直下に同心半円状の沈線文を鱗状に展開する。器形・沈線文を主体とする等の特徴から、十腰内Ⅰ式の古手に相当するものと推定される。337～340 は大津式に相当するもの。337 は口縁部片で、二条１組の沈線により描かれる弧状の沈線文を組み合わせた文様をもつもの。337～340 は集合沈線文を描くもので、339 は口縁部片、339・340 は胴部片。340 はカニバサミ状のモチーフが描かれる。341・342 は白坂３式。341 は口縁部片。小波状をなし、波頂部を軸に同心三角状沈線文が展開する。口縁部文様帯下には「く」の字状の沈線が列状に施文される。342 は頸部付近の破片で、頸部沈線下に同心三角状沈線文が施されるもの。

Ⅳ群Ｃ類（第Ⅱ－80 図 343～347、写真図版 52）

縄文時代後期中葉、ウサクマイＣ式・手稲式に相当するもの。

343 はウサクマイＣ式の口縁部片。344～346 は手稲式。344 は台付鉢。口縁部は肥厚する突起をもつ波状を呈し、隆帯によって区画される無文帯をもつ。隆帯上は縄線によるキザミが施される。隆帯直下の胴部上半の文様帯には縄文を施文した後に平行沈線文が施文され、さらに弧状の沈線で縦に区切られる。底面は鉢部ではなく台部の底に作出されており、器壁は内外面ともに密な調整を加えられている。345・346 は同一個体で、344 と同様の器形をもつものと想定される個体。頸部沈線帯は幅広の「Ｓ」字状沈線の連結によって描かれる。347 は 345・346 と同様の平行沈線文を施す胴部破片。

Ⅳ群Ｄ類（第Ⅱ－81～82 図 348～369、写真図版 52・53）

縄文時代後期後葉、堂林式に相当するもの。地文は節の細かな原体による斜行縄文、あるいは異撚の原体を交互に規則正しく横回転押圧した羽状縄文が主体である。

348～354 は磨消縄文で文様を描く口縁部破片。348～350 はＩＯ突瘤文が施されるもの。348・349 は口縁部文様帯にさらに平行沈線が加えられる。351～354 は貼瘤が施されるもので、比較的新手の個体。351 は縦位の貼瘤列を軸に２条一組の弧状沈線文が展開する。352・353 は貼瘤を中心に磨消縄文が展開する。354 は貼瘤にさらに刺突が加えられるもの。

355～362 はＩＯ突瘤文列の施された口縁部破片。355・357・358 はさらに沈線文を加えるもの。

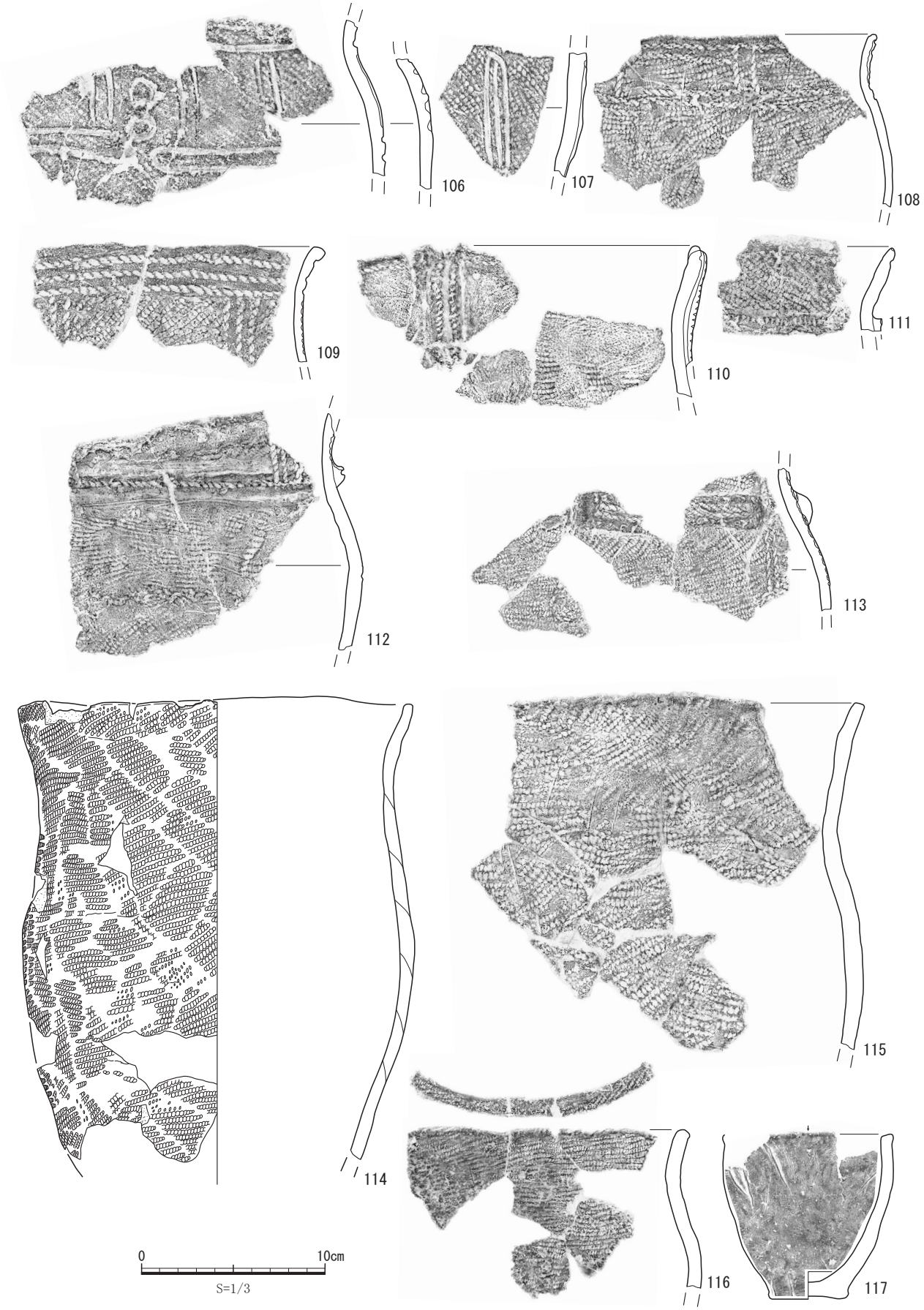
363～366 は摘み上げを加えたＩＯ突瘤文の施される口縁部破片。363～365 はさらに平行沈線を加える。

367 は弧状モチーフを主体とした磨消縄文の施される胴部破片。368 は胴部破片で、348 と同一個体。

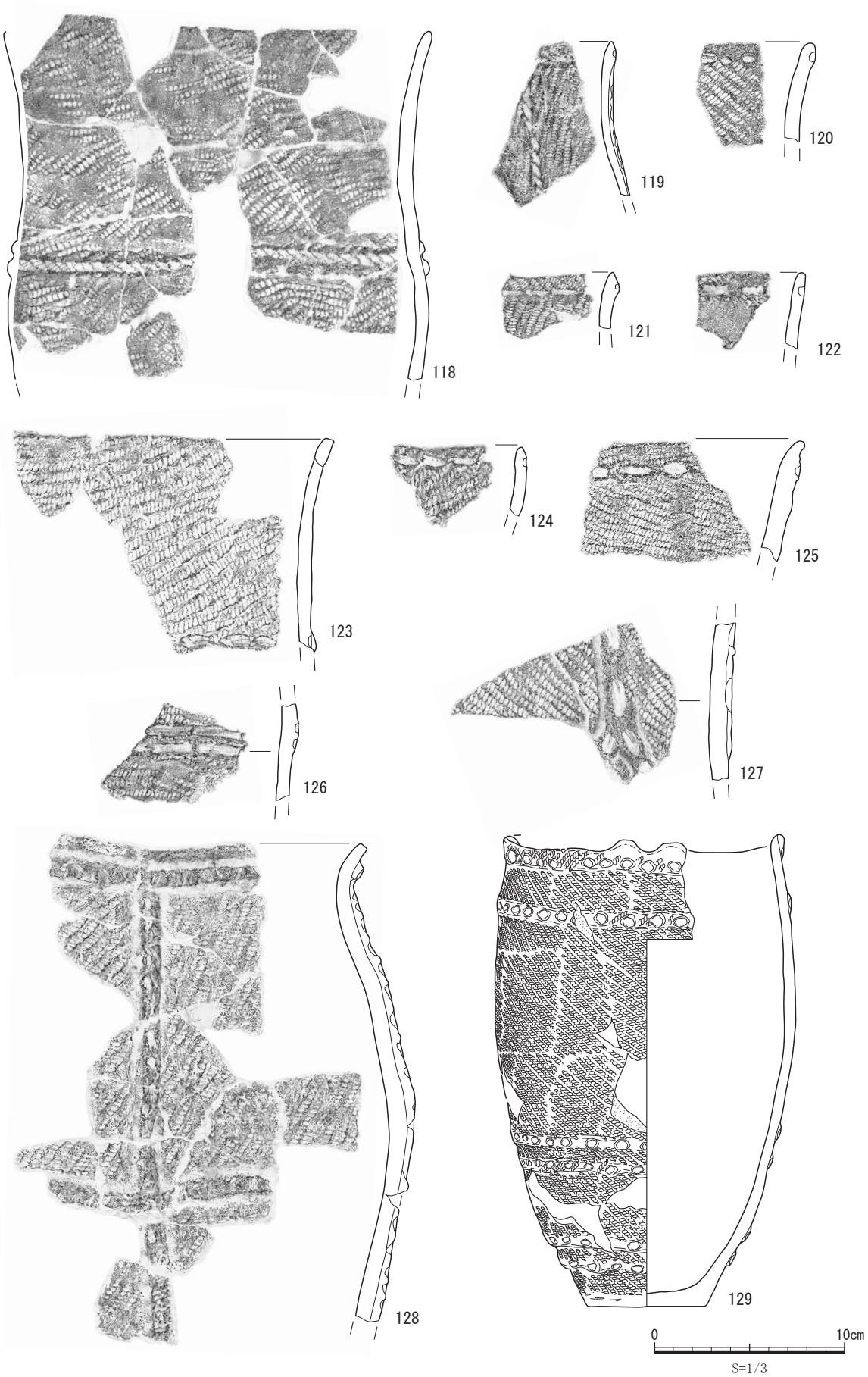
369 は突瘤・貼瘤をもたず、磨消縄文によって胴部に三叉文様のモチーフが描かれるもの。土肥研晶による編年（北海道埋蔵文化財センター2001）におけるⅥ～Ⅶ期、堂林式後半期に相当すると推定される。

Ⅴ群：縄文時代晩期（第Ⅱ－82 図 370、写真図版 53）

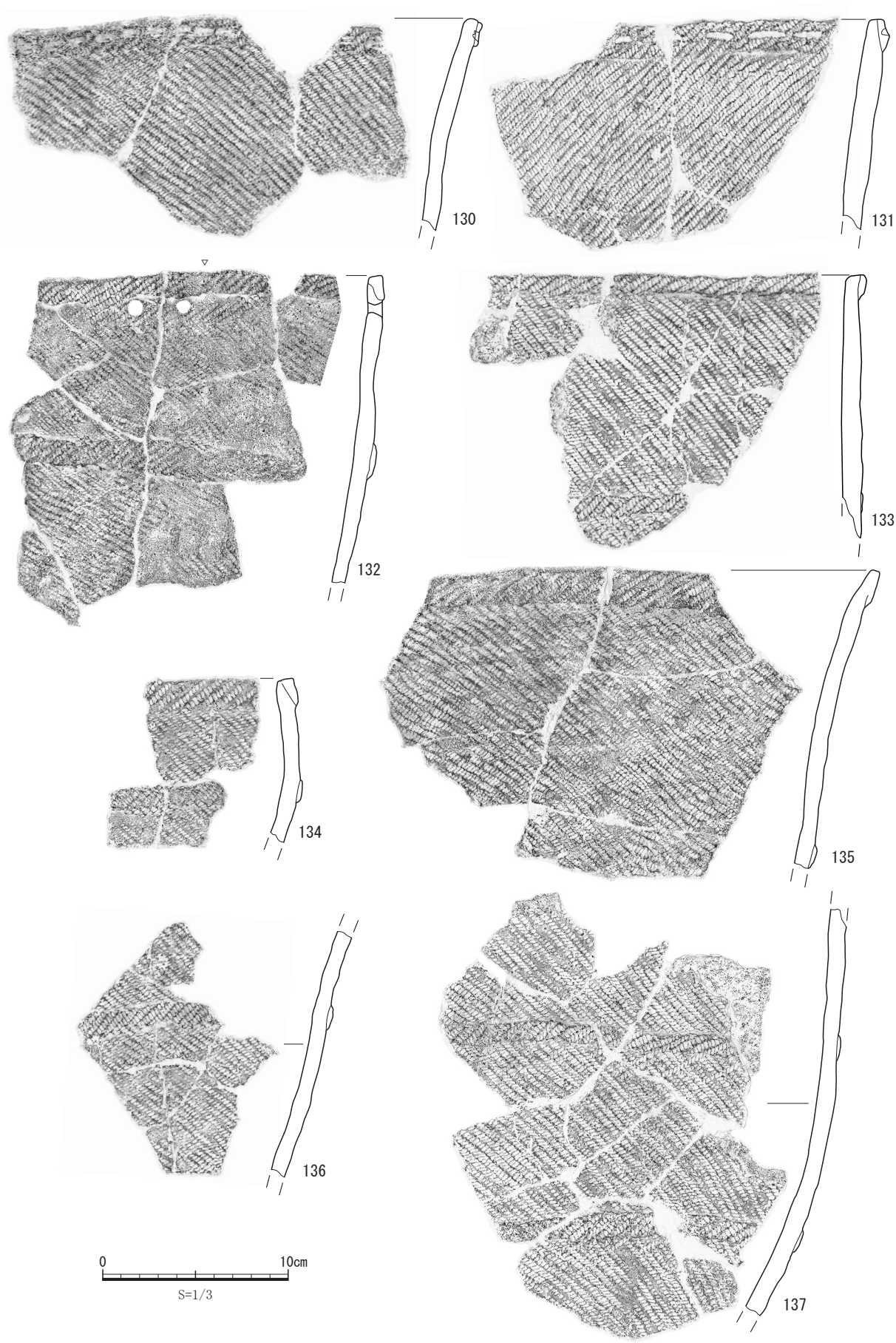
370 は口縁部片。口縁端部に平行沈線が２条巡り、さらに垂下する沈線によって工字状に連結している。大洞Ａ式に相当するものと推定される。



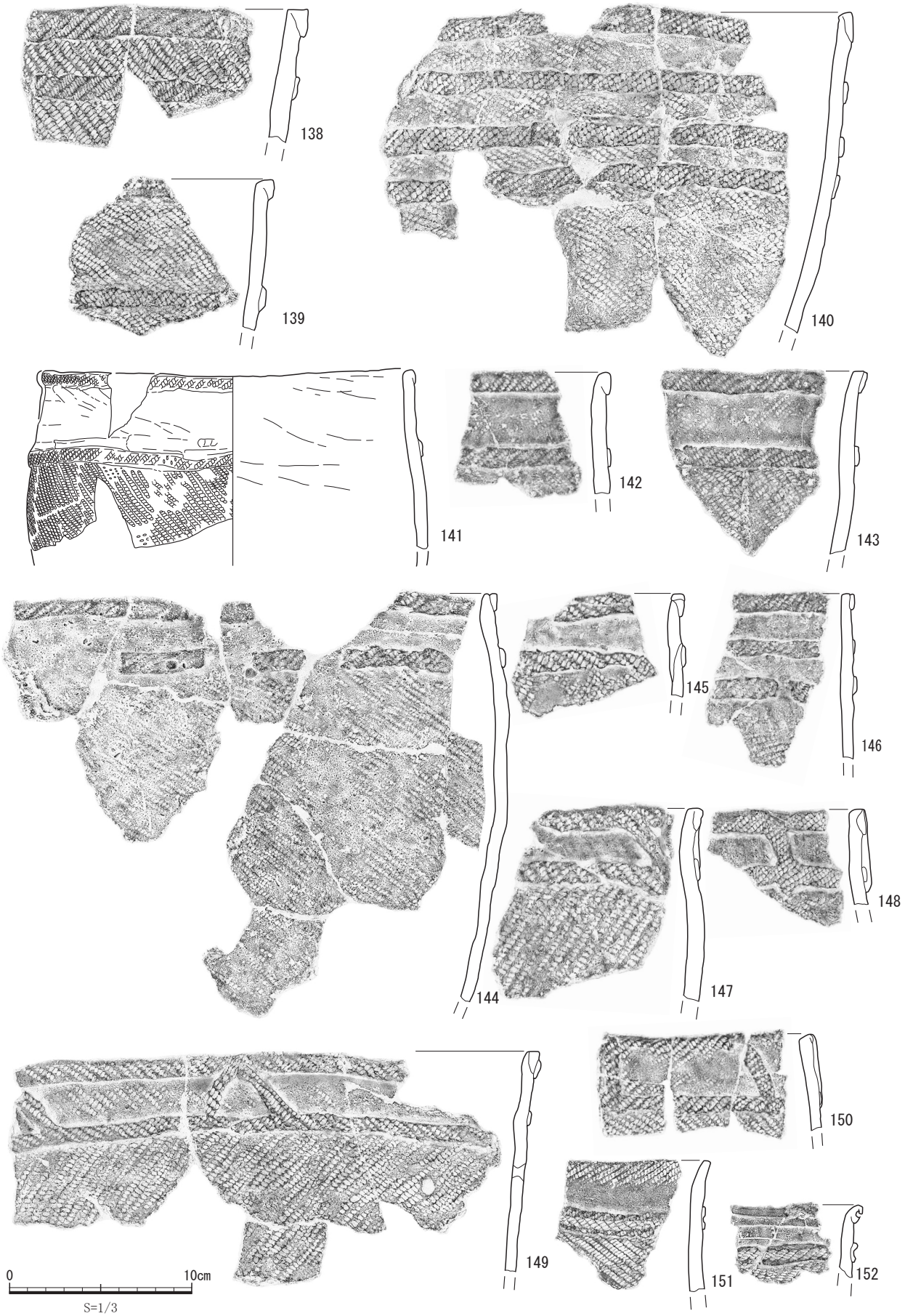
第Ⅱ－59図　遺構外出土の土器（19）



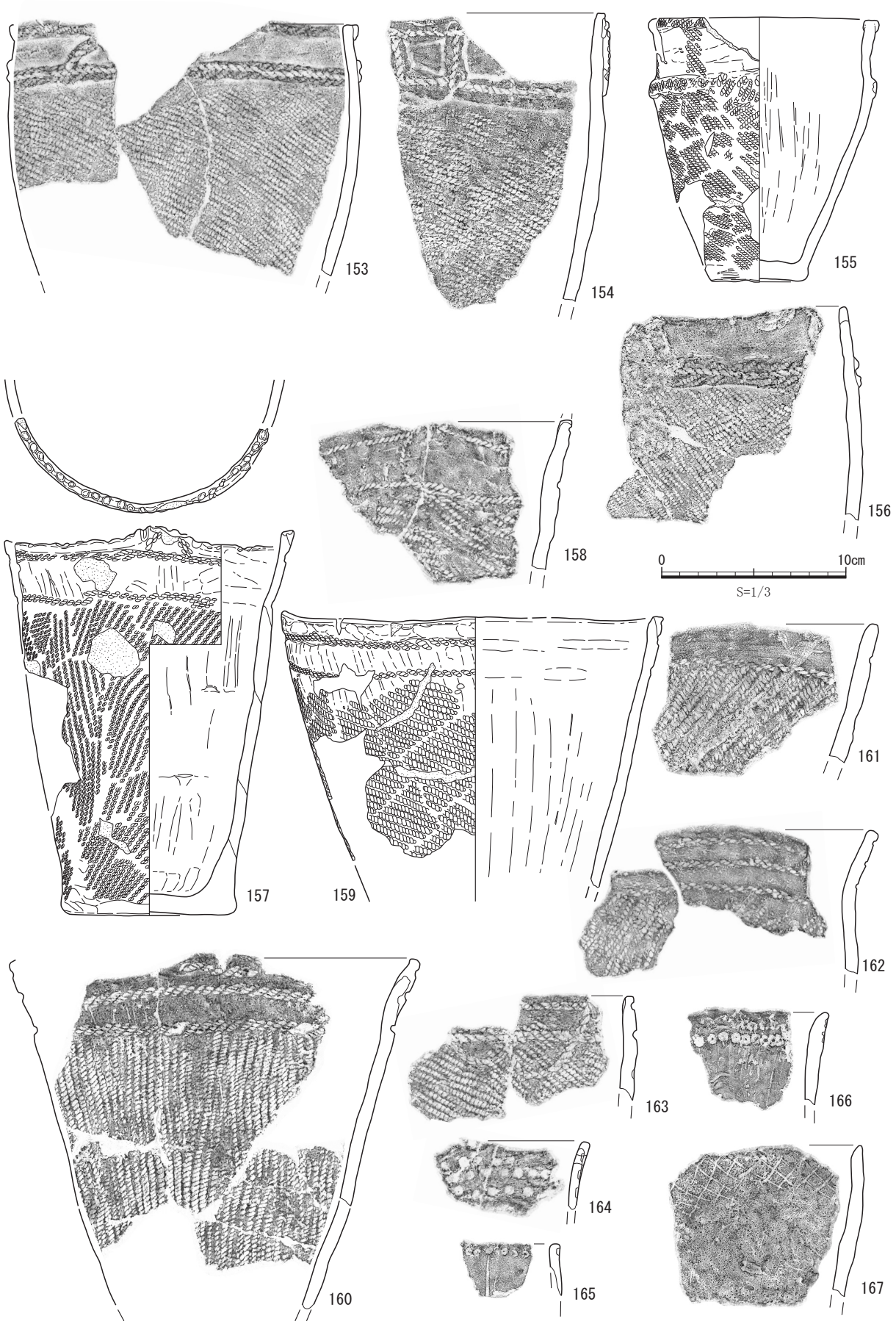
第Ⅱ－60図　遺構外出土の土器（20）



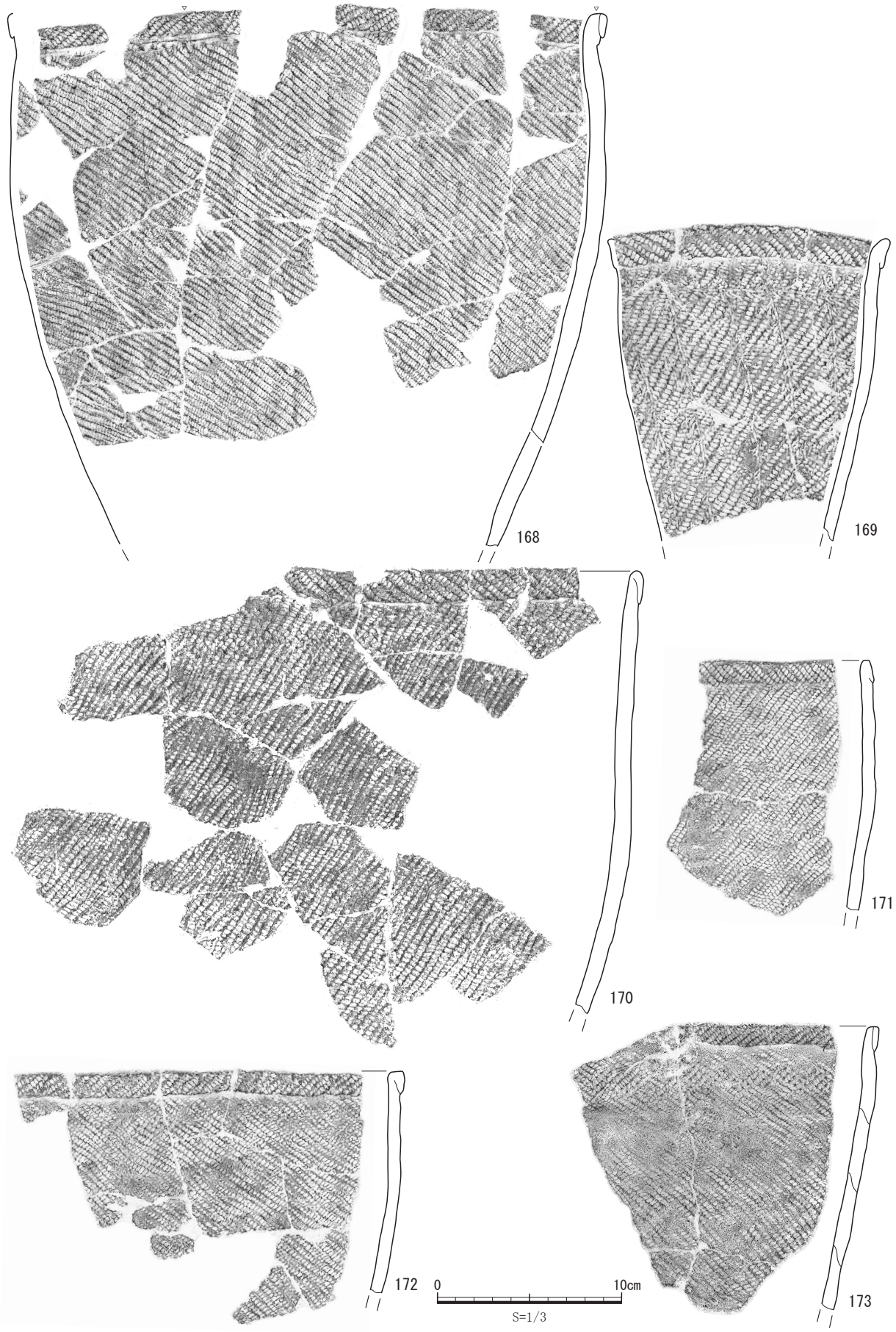
第Ⅱ－61図　遺構外出土の土器（21）



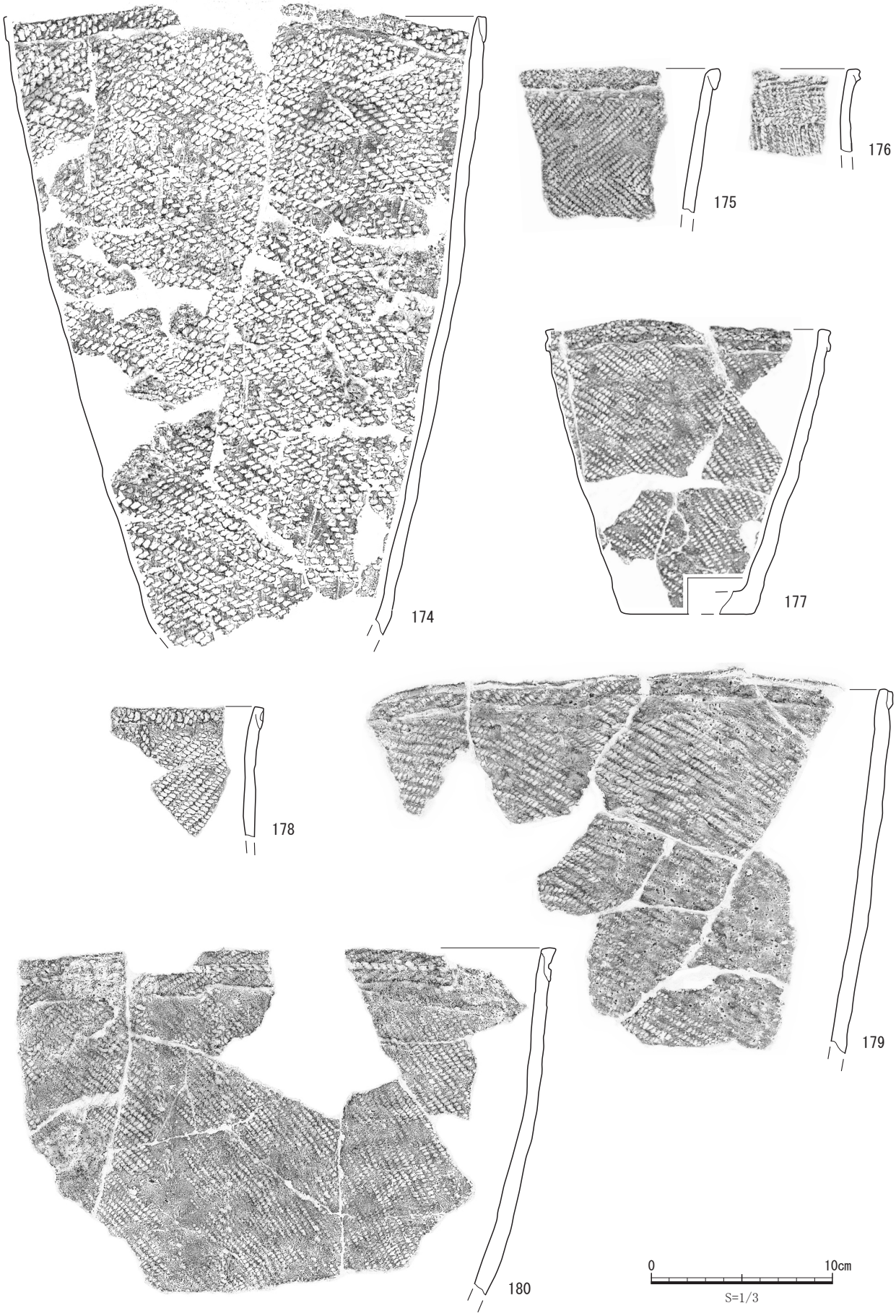
第Ⅱ－62図　遺構外出土の土器（22）



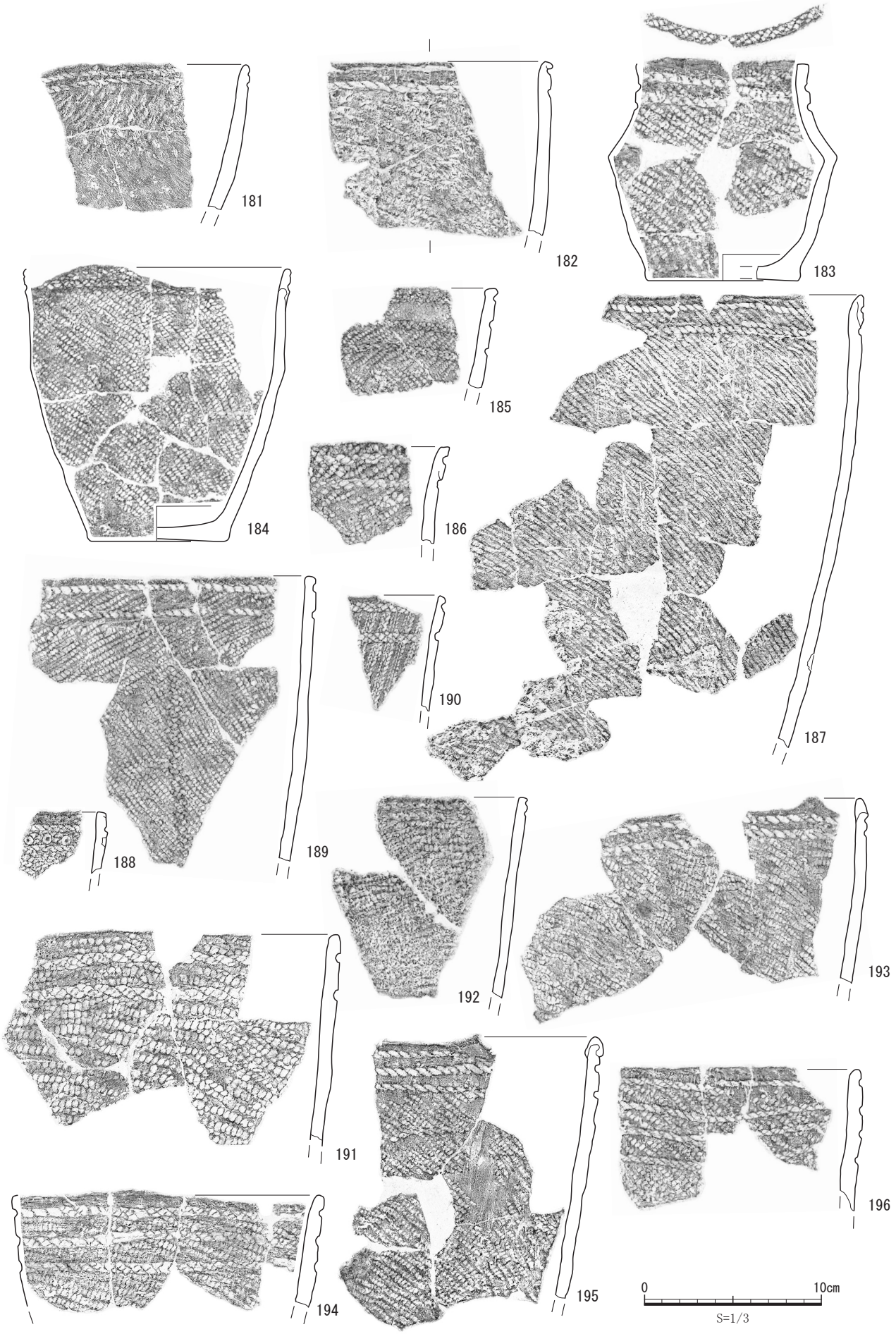
第Ⅱ－63図　遺構外出土の土器（23）



第Ⅱ－64図　遺構外出土の土器（24）

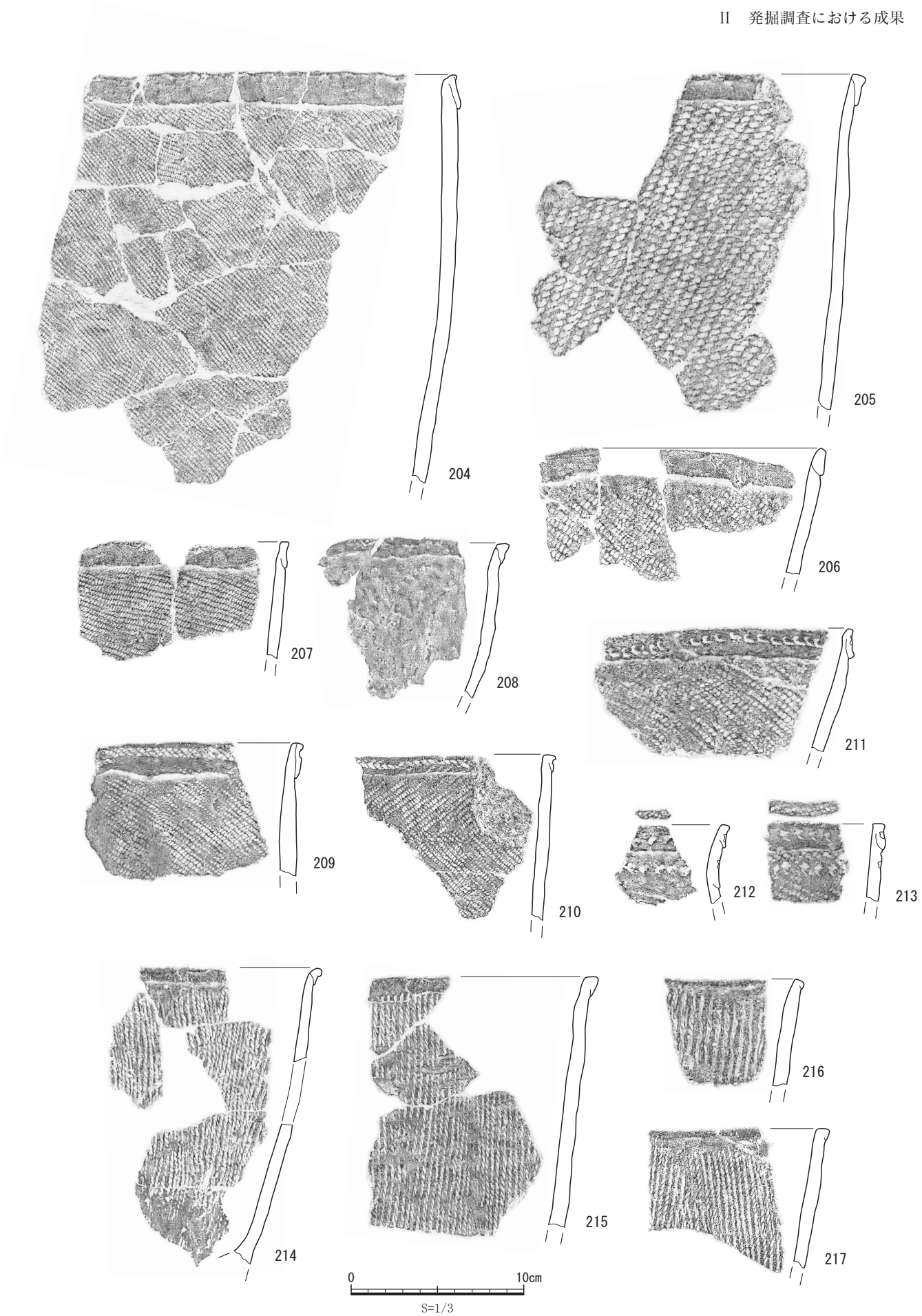


第Ⅱ－65図　遺構外出土の土器 (25)

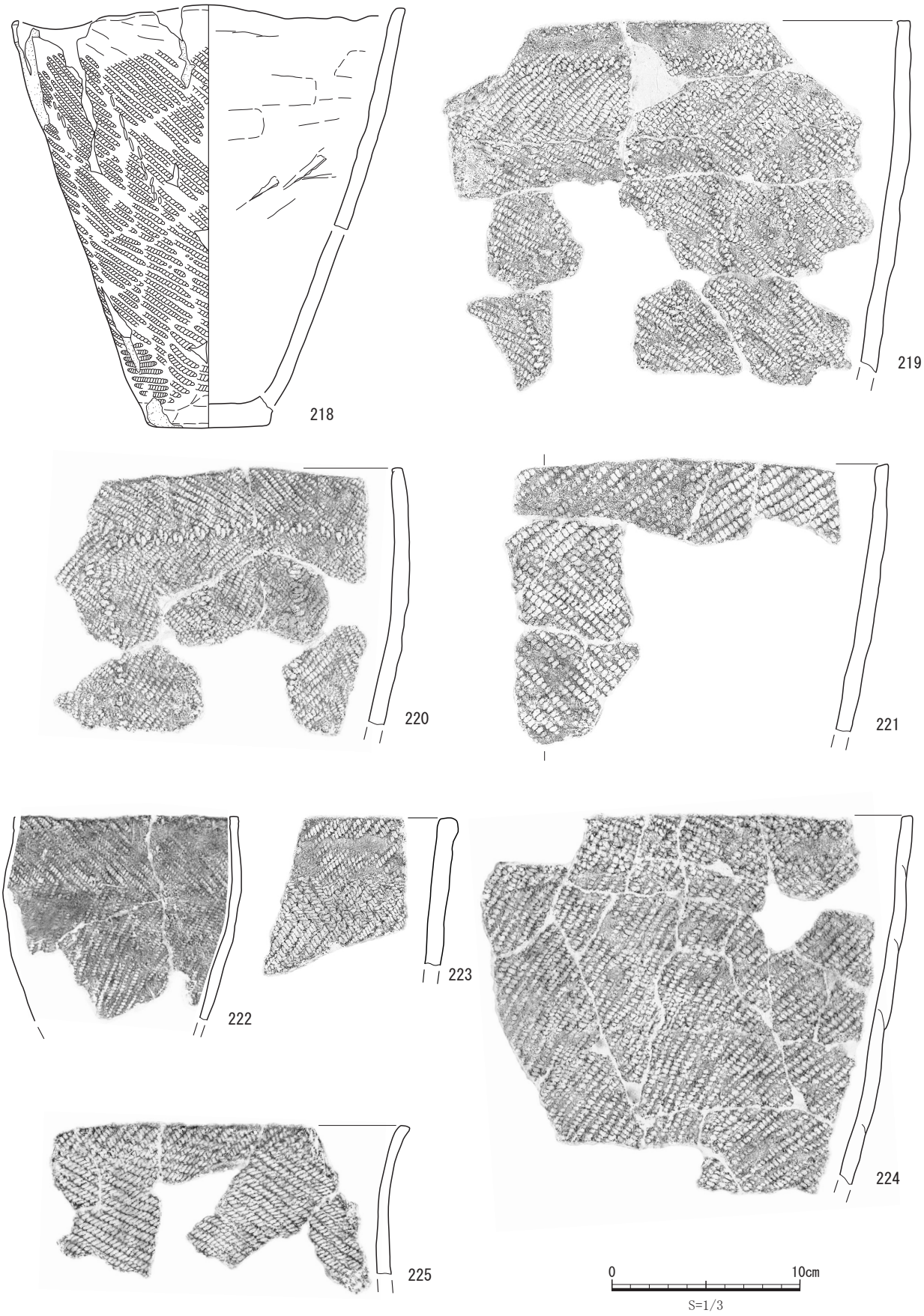


第Ⅱ－66図　遺構外出土の土器（26）

第Ⅱ－67図　遺構外出土の土器（27）

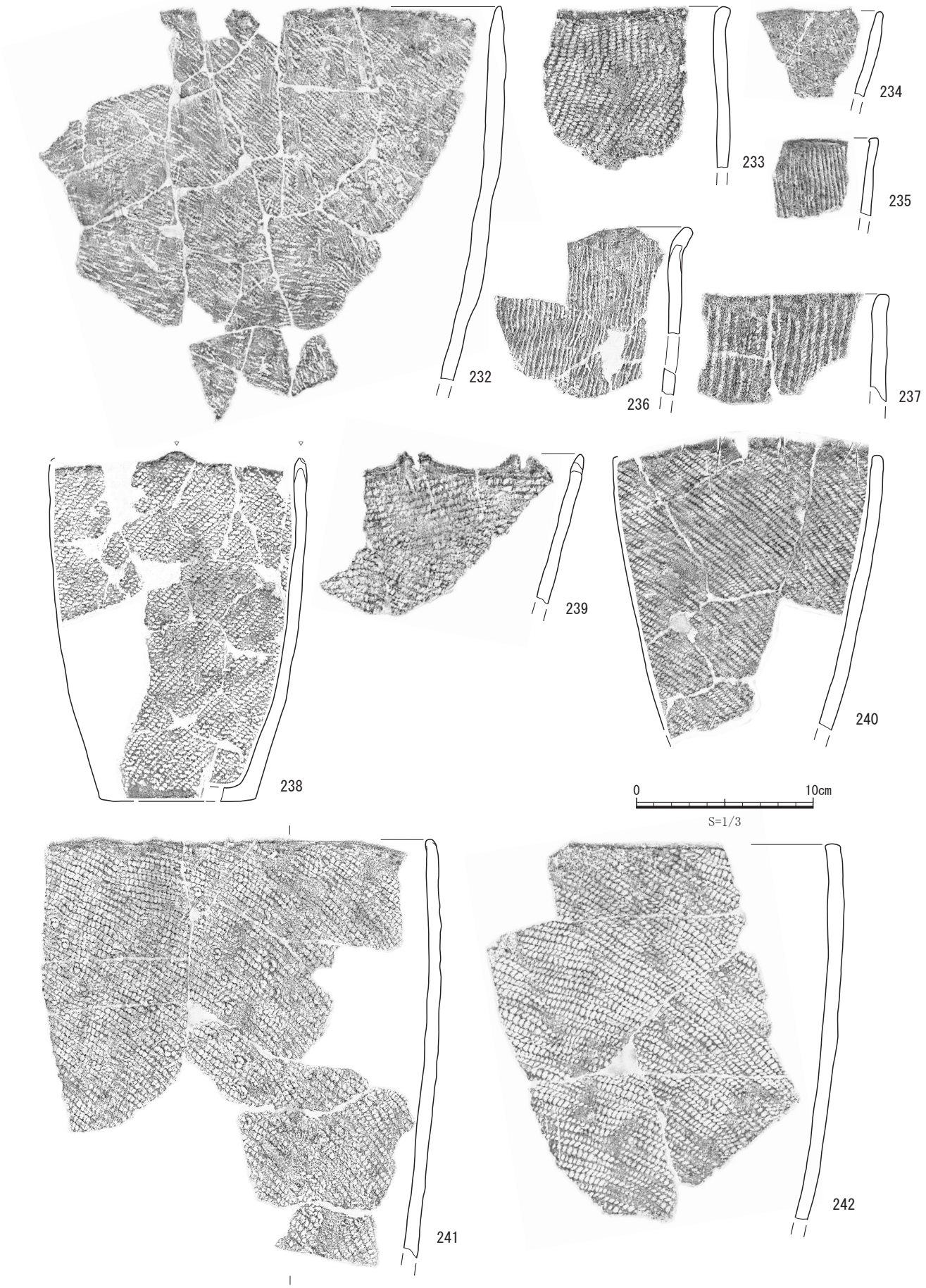


第Ⅱ－68図　遺構外出土の土器（28）

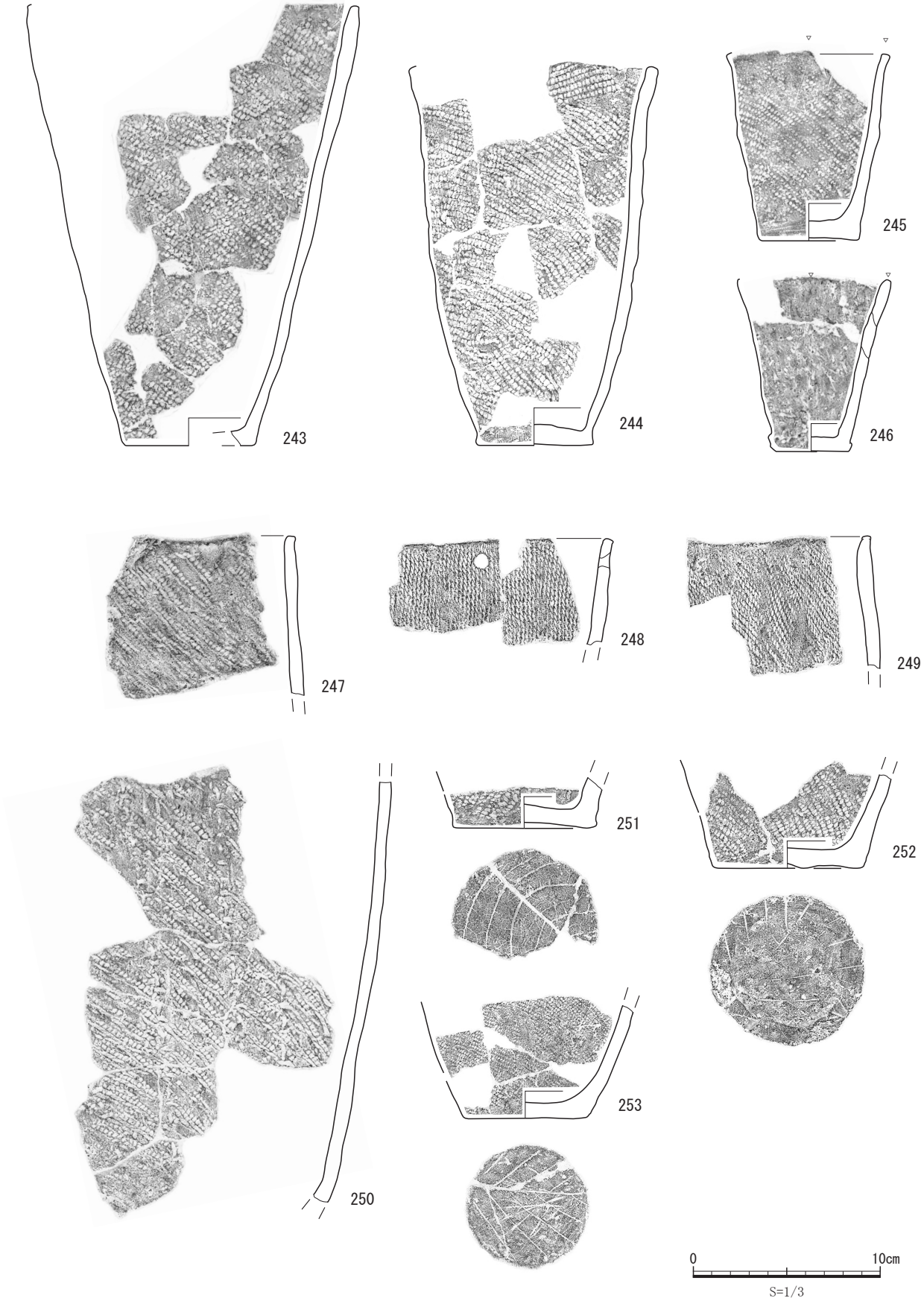


第Ⅱ－69図　遺構外出土の土器（29）

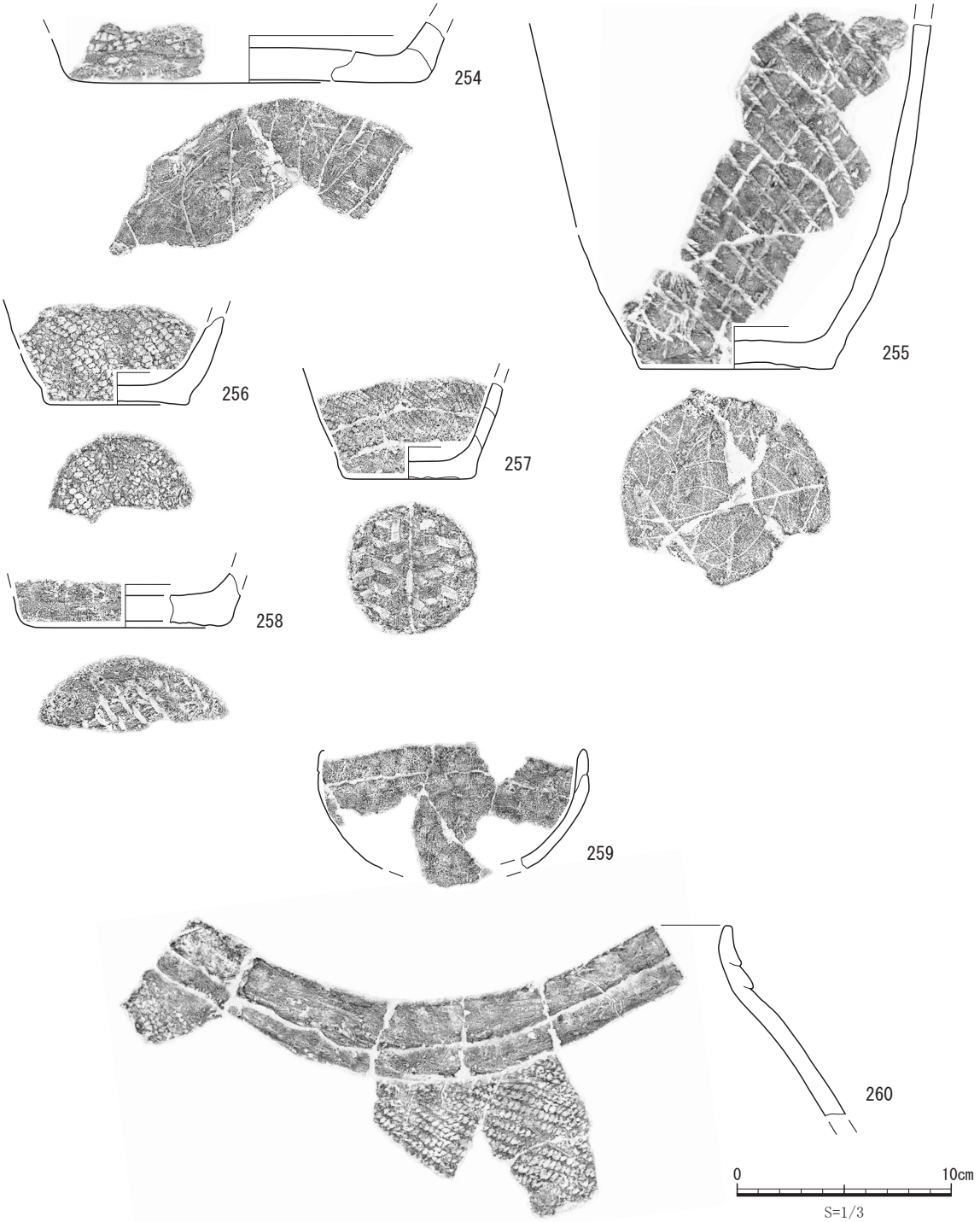
第Ⅱ－70図　遺構外出土の土器（30）



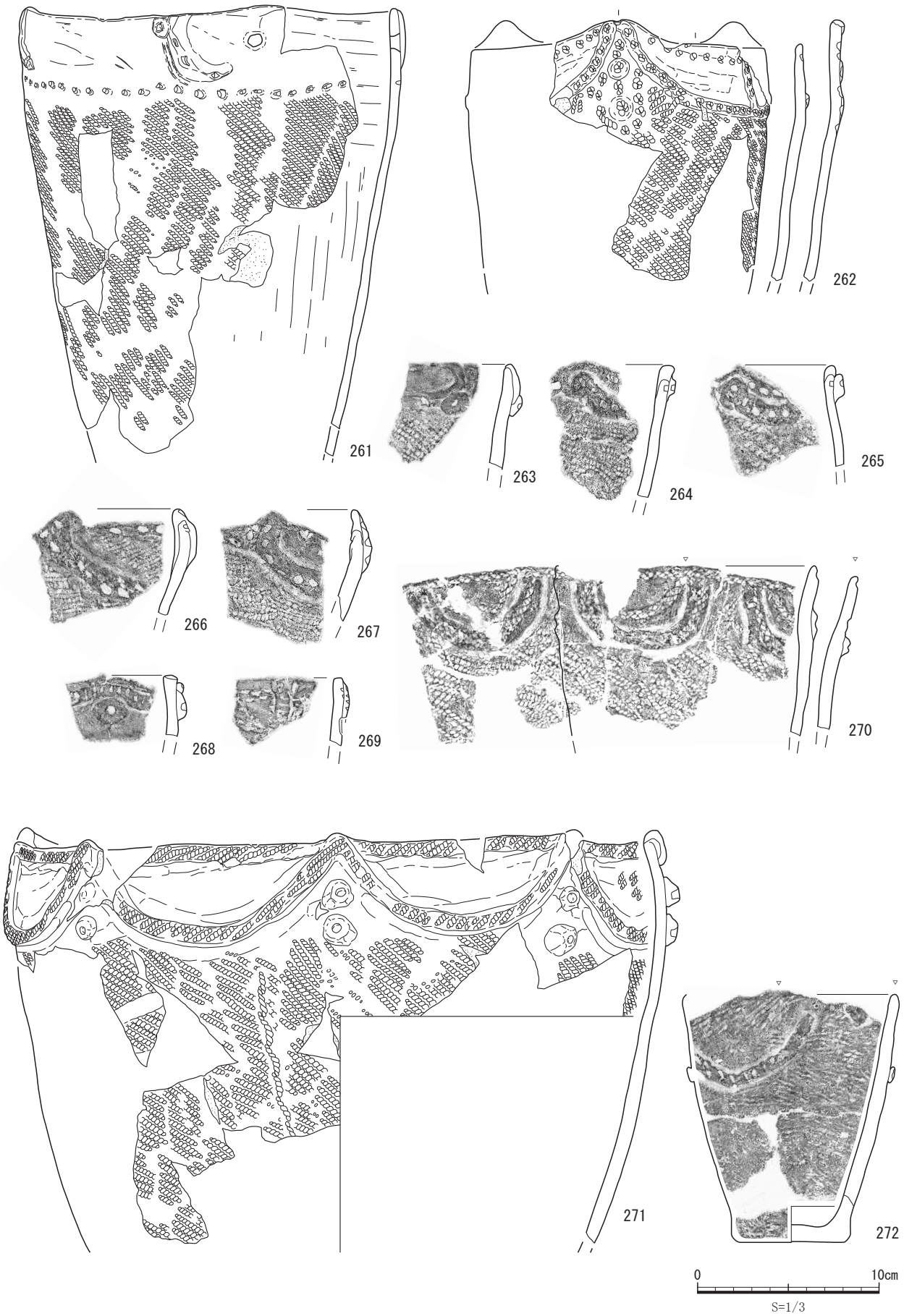
第Ⅱ－71図　遺構外出土の土器（31）



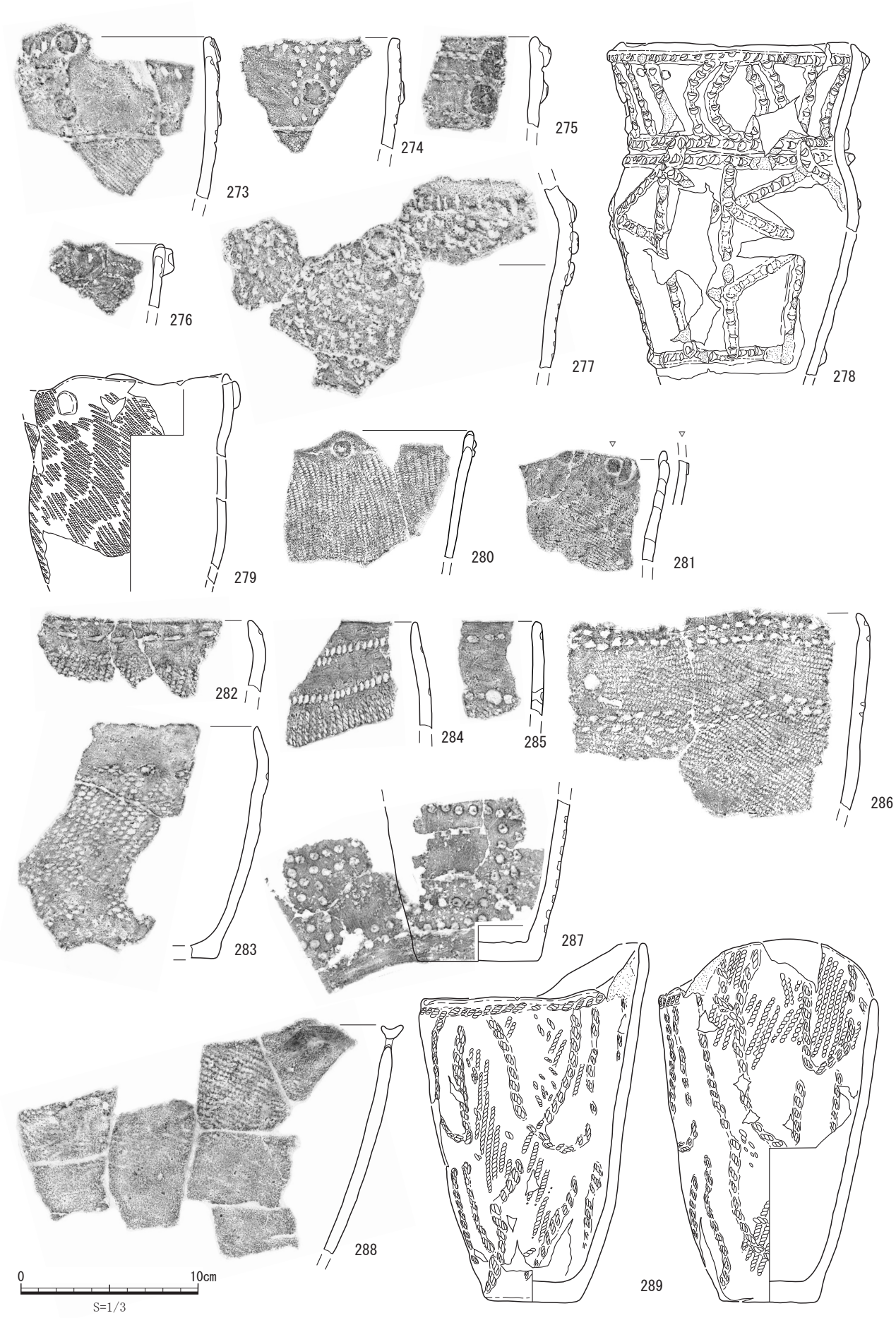
第Ⅱ－72図　遺構外出土の土器（32）



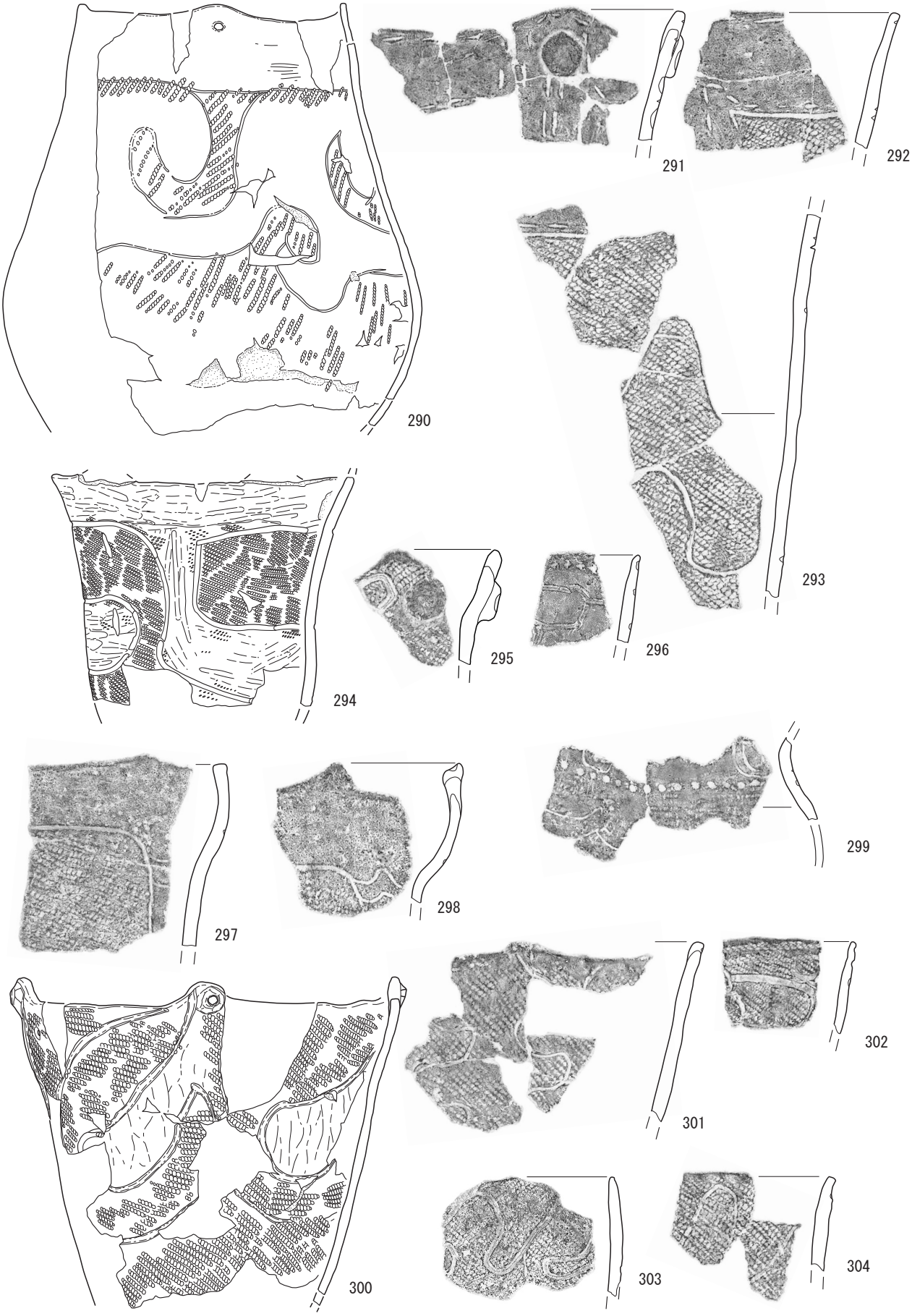
第Ⅱ－73図　遺構外出土の土器（33）



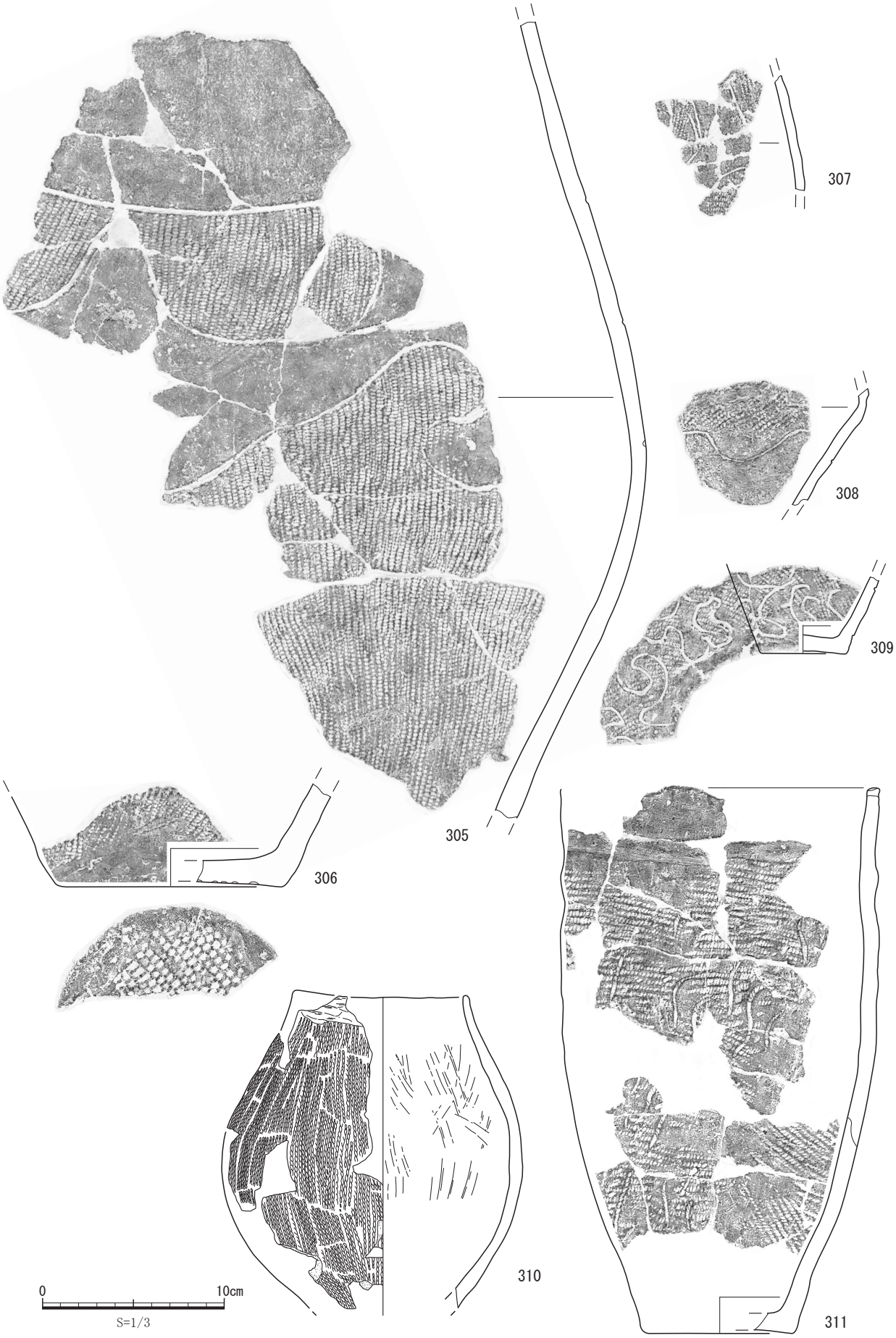
第Ⅱ－74図　遺構外出土の土器（34）



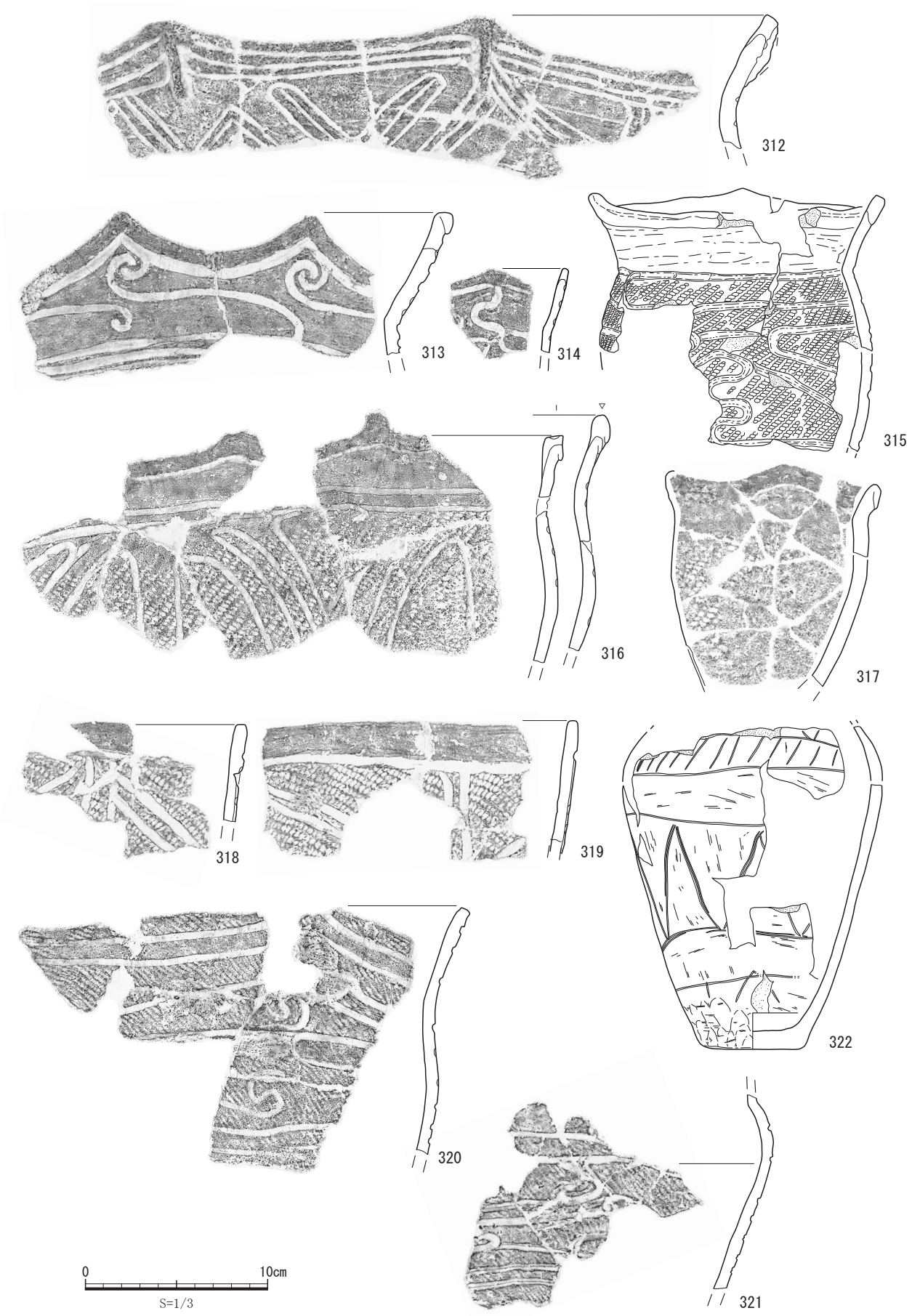
第Ⅱ－75図　遺構外出土の土器（35）



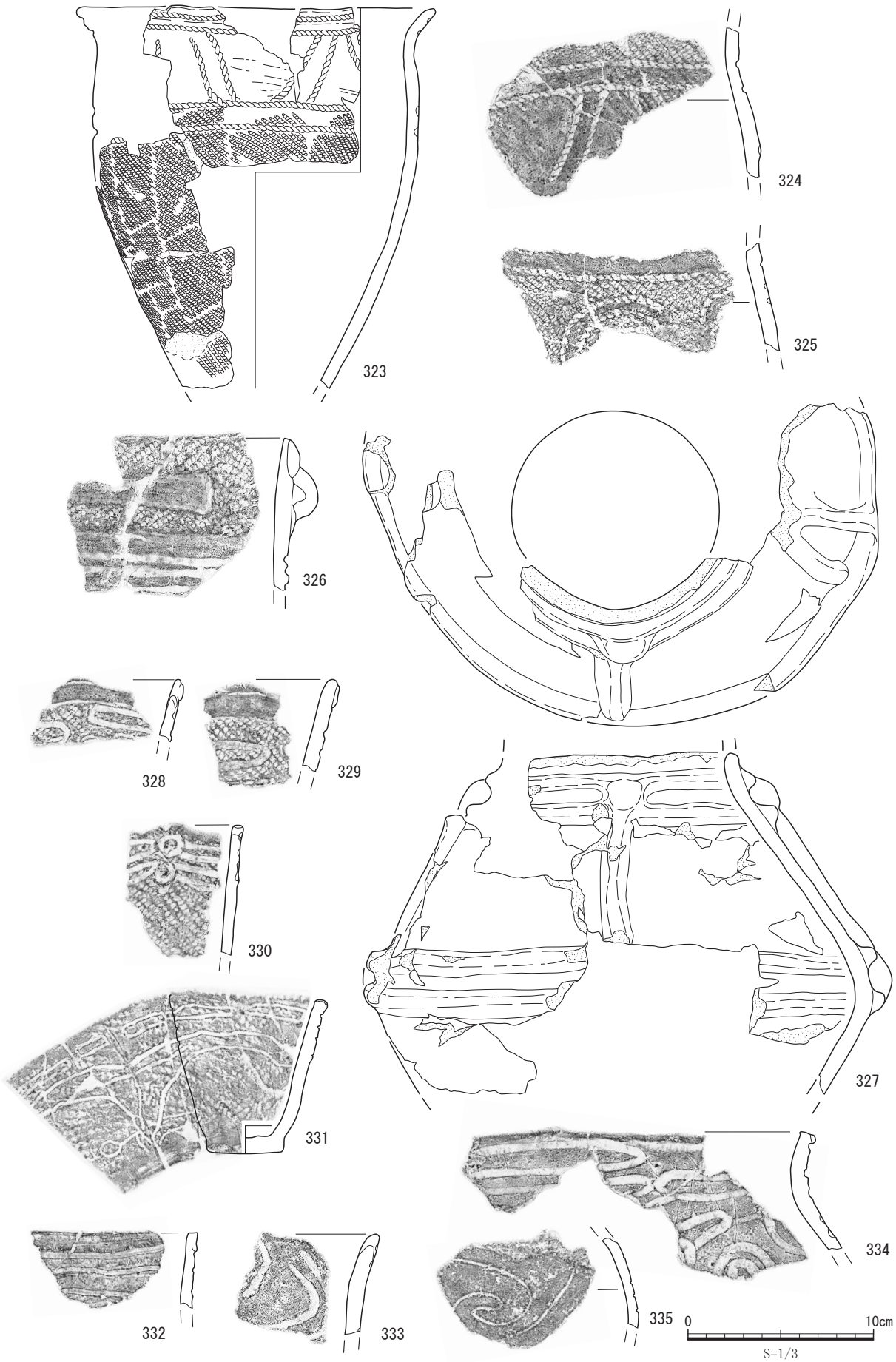
第Ⅱ－76図　遺構外出土の土器（36）



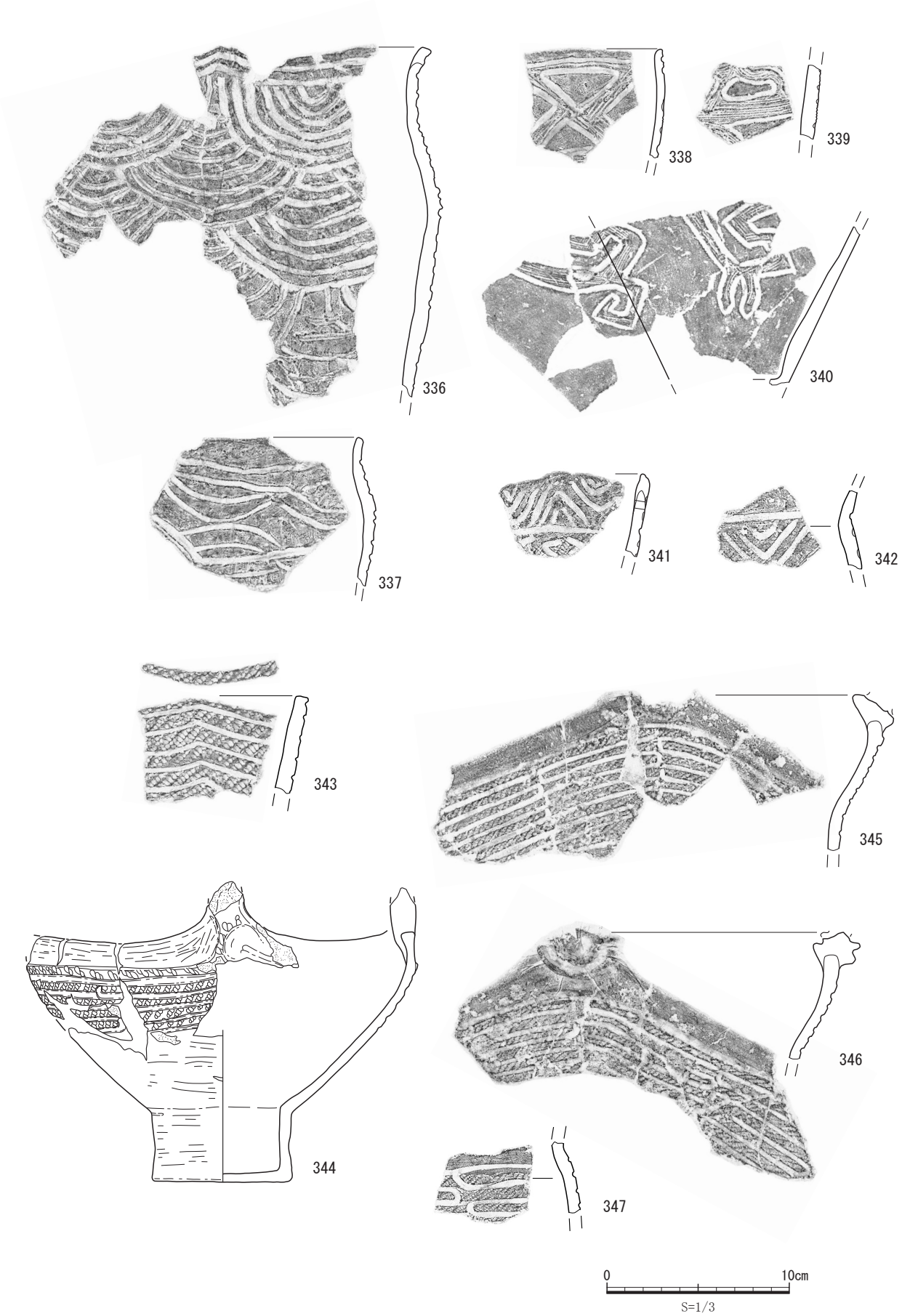
第Ⅱ－77図　遺構外出土の土器（37）



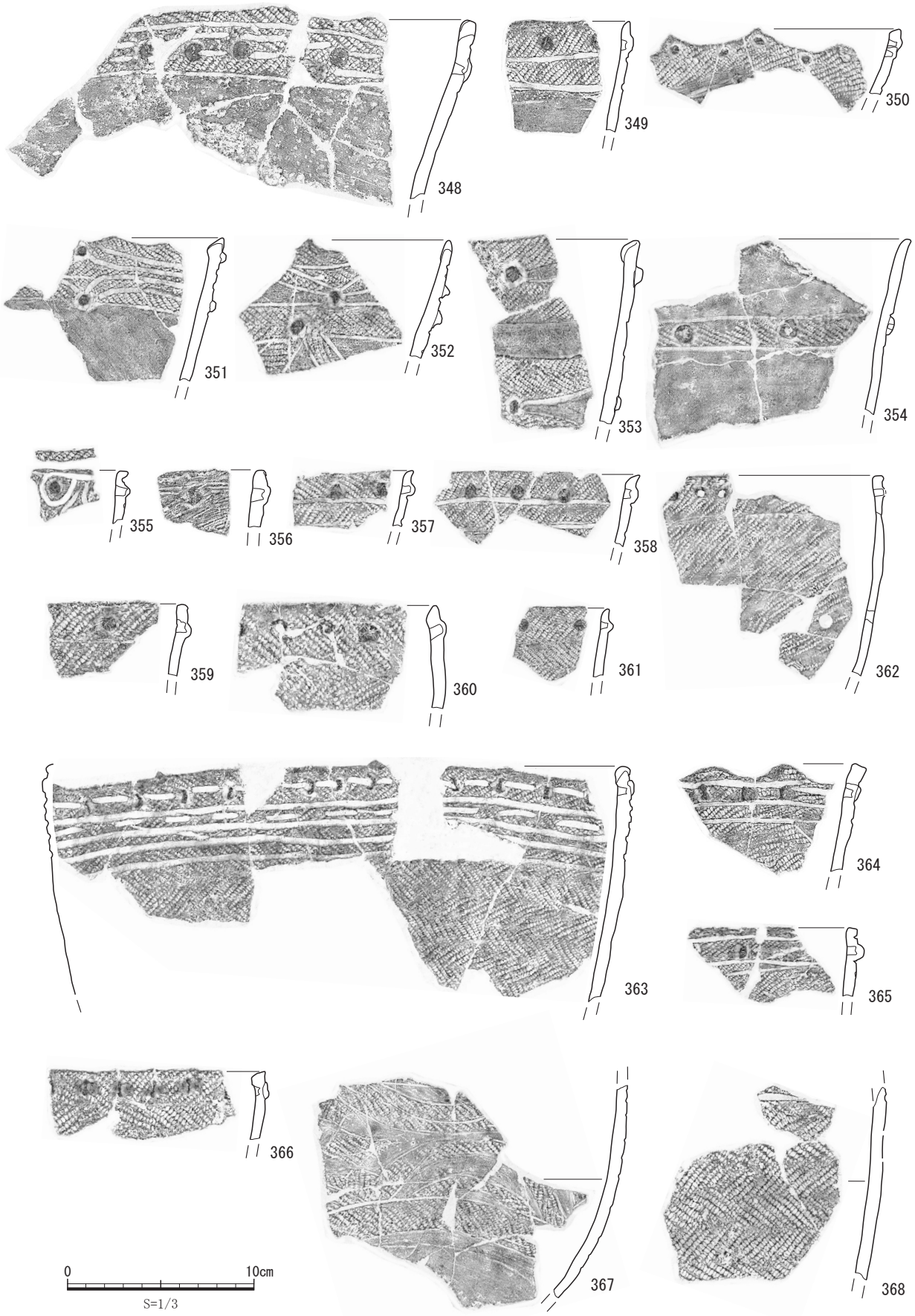
第Ⅱ－78図　遺構外出土の土器（38）



第Ⅱ－79図　遺構外出土の土器（39）



第Ⅱ－80図　遺構外出土の土器（40）



第Ⅱ－81図　遺構外出土の土器（41）